

特別史跡名古屋城跡全体整備検討会議 庭園部会(第.36回)

日時：令和6年2月26日(月) 13:30～15:30

場所：西の丸会議室

次 第

1 開会

2 あいさつ

3 議事 二之丸庭園の修復整備について

<資料1>

4 閉会

特別史跡名古屋城跡全体整備検討会議 庭園部会(第36回)出席者名簿

日時：令和6年2月26日(月) 13:30～15:30

場所：西の丸会議室

(敬称略)

■構成員

氏名	所属	備考
丸山 宏	名城大学名誉教授	座長
仲 隆裕	京都芸術大学教授	副座長
栗野 隆	東京農業大学教授	(リモート)
高橋 知奈津	奈良文化財研究所主任研究員	

■オブザーバー

氏名	所属	備考
野村 勘治	有限会社野村庭園研究所	
平澤 毅	文化庁文化財第二課主任文化財調査官	
山内 良祐	愛知県県民文化局文化部 文化芸術課文化財室 技師	

二之丸庭園の修復整備について

1 北園池の修復状況

近年の北園池の修復状況は下図のとおりとなる。



事項		凡例	施工年度	備考
余芳移築再建			R5年度～	
余芳周辺整備	余芳周辺		-	
	園池修理		地形、園路 等	-
			護岸傾倒、池底 擬岩等造作物 等	-
			護岸ひび割れ	R4～5年度
	石組		R3～5年度	権現山南側、園池北側

図1 近年の北園池の修復状況

2 護岸傾倒等の修理

(1) 護岸の概況

- 池底や護岸側面がタタキで構築され、その上には石組や擬岩等造作物が据えられている。
- 護岸タタキは高さ60cm～70cm程度、天端や欠損等で確認できる厚みは12～15cm程度。
- 園池の西側は版築状に積み上げられ、東側は表面を叩きながら構築したものと推定する。

(2) 護岸傾倒等の位置

護岸傾倒等は計20箇所あり、その位置は下図のとおりとなる。

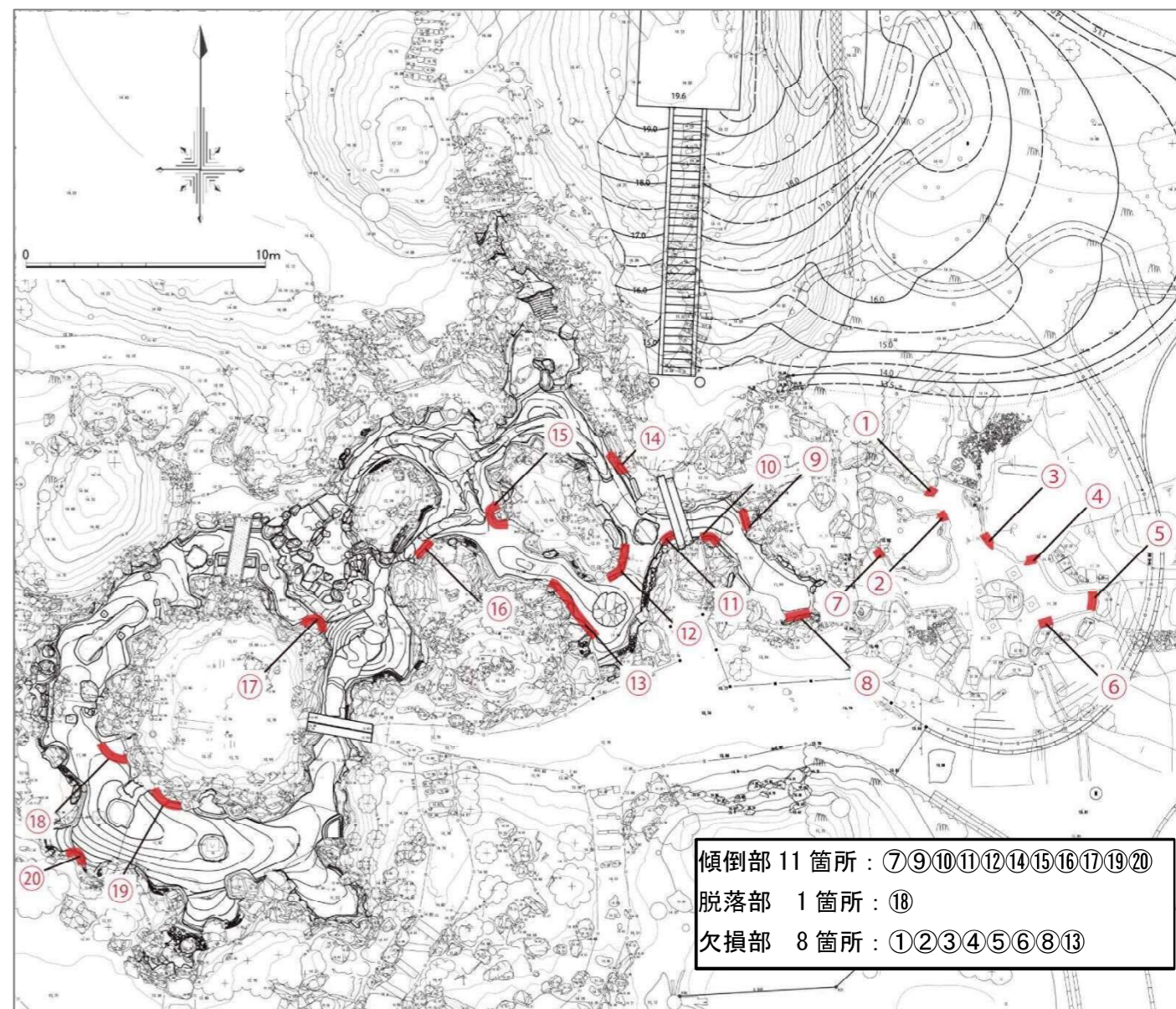


図2 護岸傾倒等の位置

(3) 護岸傾倒等の修理方法

事項		(1) 傾倒部 11箇所	(2) 脱落部 1箇所	(3) 欠損部 8箇所	
毀損概要	現況	<ul style="list-style-type: none"> ・亀裂、傾倒 	<ul style="list-style-type: none"> ・亀裂、傾倒、背面土なし 	<ul style="list-style-type: none"> ・欠損 	
	推定する原因	<ul style="list-style-type: none"> ・タタキ護岸上部に設置されている護岸石組みや景石の荷重、樹木根の伸長、経年の変化 等 	<ul style="list-style-type: none"> ・隣接部の傾倒、経年の変化 等 	<ul style="list-style-type: none"> ・傾倒、脱落、経年の変化 等 	
修理方針		<ul style="list-style-type: none"> ・取り外して再設置する。 ・傾倒箇所を取り外し原因箇所への対策を行う。 ・タタキ護岸上部の景石は現状の位置からできるだけ動かさないように対策する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・取り外して再設置する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・再設置する。 ・鋼土等で保護されている箇所は現状を活かす。 	
修理方法		<p>ア タタキ護岸の上部の景石を三又で吊る等既存石材が動かないように養生する。</p> <p>イ 傾倒しているタタキ護岸を取り外す。</p> <p>ウ 傾倒したタタキ護岸の背面に堆積した土砂や樹木根を除去する等清掃して状況を確認する。</p> <p>エ 必要に応じ、既存石材を丸太等で支持して安定化を図る。</p> <p>オ 取り外したタタキ護岸を据え直し、タタキ等で隣接部と結合する。</p> <p>カ その他の亀裂箇所の補修、護岸の上部のタタキや鋼土等での保護を行う。</p>	<p>丸太等で 石材を支持</p> <p>取り外し、 清掃後据え直し</p> <p>【修理模式図】</p>	<p>ア 脱落したタタキ護岸を取り外す。</p> <p>イ 取外し箇所に堆積した土砂を除去する等清掃して状況を確認する。</p> <p>ウ 取り外したタタキ護岸を据え直し、タタキ等で隣接部と結合する。</p> <p>エ その他の亀裂箇所をタタキ等で補修する。</p>	<p>ア 下部からの版築による締固め、もしくは正面からの突き固めを行い、隣接部と取り合わせる。</p> <p>イ 当該箇所が鋼土等で保護されて安定化している場合は、現状を活かして版築等する。</p> <p>ウ 当該箇所での土のう設置等背面土が浸食されている場合は、タタキ護岸の版築等とともにその背面に土を突き入れる。また、必要に応じ、樹木根の除去や石材の安定化を図る。</p> <p>エ 護岸の上部をタタキや鋼土等で保護する。</p>

※修理に使用するタタキは、真砂土 1 m³あたり石灰 120kg と塩化マグネシウム 10~20kg 混合を標準とする (施工実績は R4 年度及び R5 年度の亀裂部修理)

3-1 余芳周辺の整備

余芳周辺整備にあたり、地形、園路、延段、園池の沢飛石及び州浜について検討した。

整備計画書の基本方針にあるとおり、北御庭については『御城御庭絵図』に描かれた空間性を回復することを基本とする。また、整備計画書の「第2章計画地の概要 第2節沿革と史料 第2項参考史料の概要」にあるとおり、同時代に描かれた『尾二ノ丸御庭之図』は、『御城御庭絵図』と異なる箇所が見られるため、2つの絵図を比較検証することで考察を深める。また、『桜御間南御庭四季之図』は、庭石の色彩が石材の違いを表していると考えられ、二之丸庭園で使われた材料の検証において参考とする。さらに、余芳と思われる第14代藩主慶勝によって撮影された古写真についても史料として取り扱う。

(1) 古絵図

- ア 御城御庭絵図／作成年代：文政年間（名古屋市蓬左文庫所蔵）（図3-1-1）
第10代藩主斉朝により改修された二之丸庭園を詳細に描いた絵図で、文政年間に作成されたと考えられる。
- イ 尾二ノ丸御庭之図／作成年代：文政以降（徳川美術館所蔵）（図3-1-2）
文政期の庭園を描いた詳細な絵図であり、二度の大きな修正が認められる。
- ウ 桜御間南御庭四季之図／作成年代：文政以降（名古屋市蓬左文庫所蔵）（図3-1-3）
二之丸御殿の桜之御間南庭を描いた絵図である。

(2) 古写真

- ア 第14代藩主慶勝によって撮影された写真。余芳に関する写真は1枚確認されている。（徳川林政史研究所所蔵）（写真3-1-1）

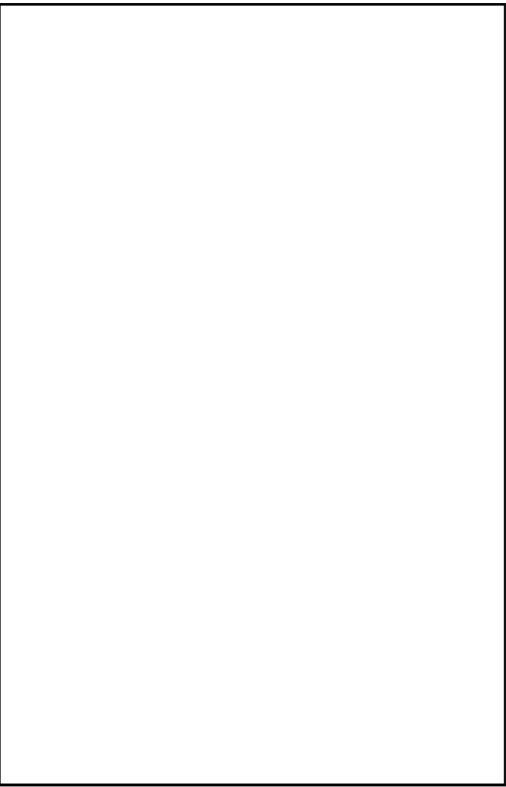


写真 3-1-1 二之丸御庭の御茶屋
（徳川林政史研究所所蔵）



図 3-1-1 『御城御庭絵図』
（名古屋市蓬左文庫所蔵）

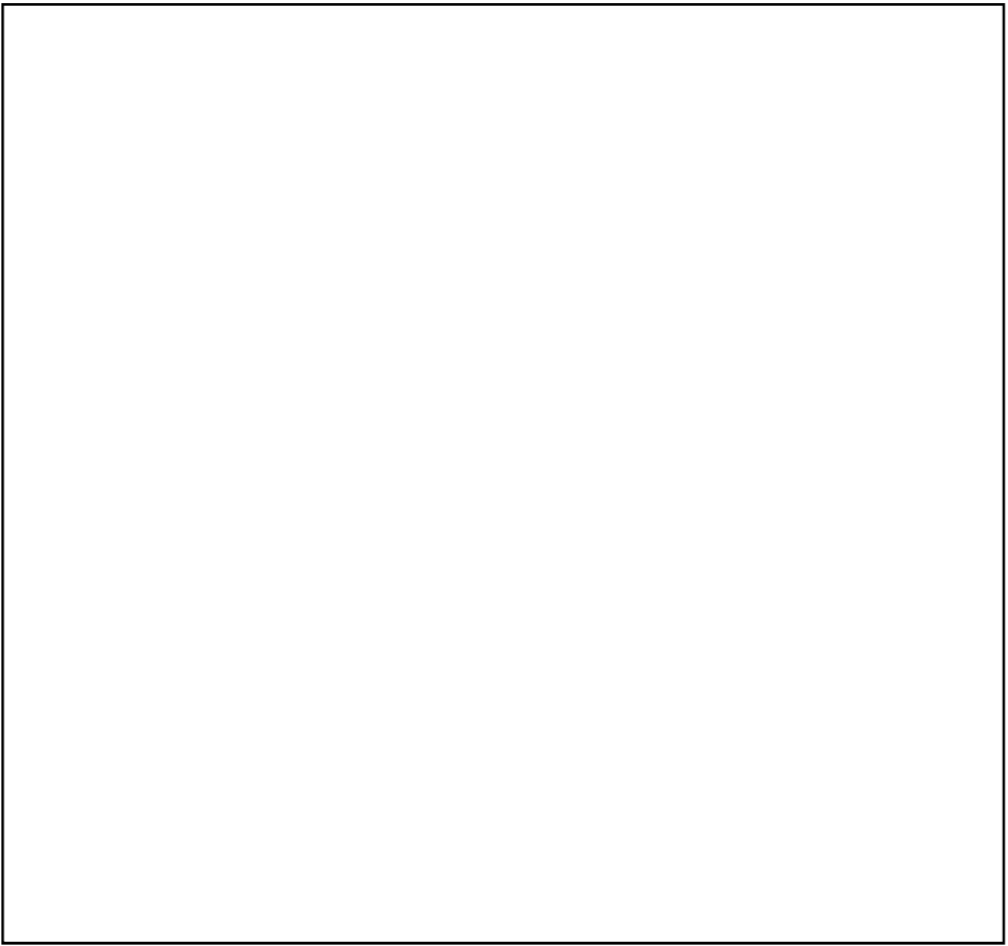


図 3-1-2 『尾二ノ丸御庭之図』
（徳川美術館所蔵）

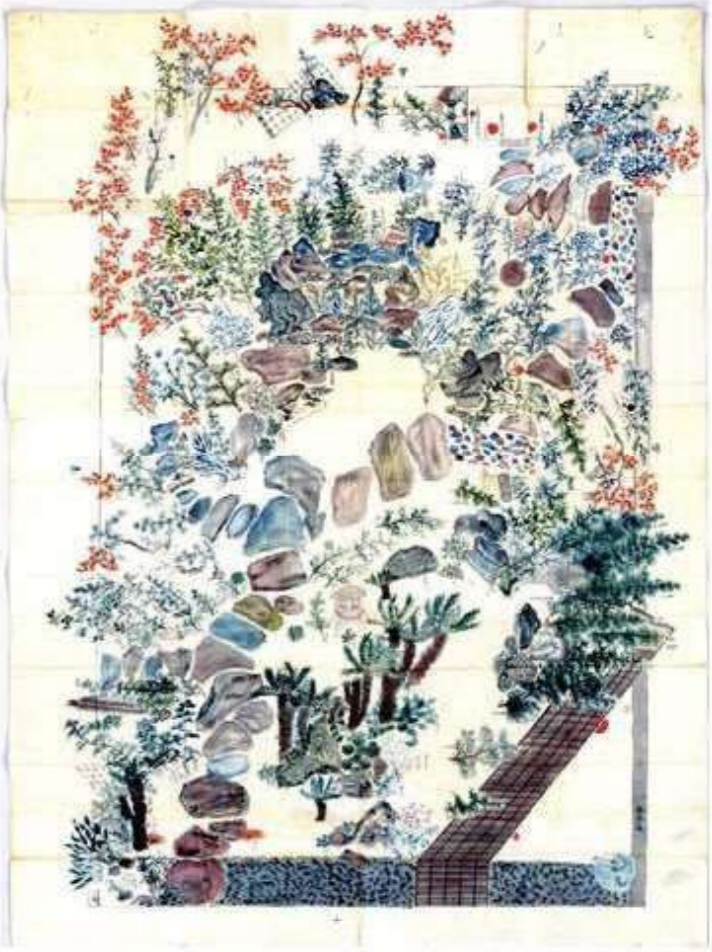


図 3-1-3 『桜御間南御庭四季之図』
（名古屋市蓬左文庫所蔵）

(3) 絵図の比較検証

余芳に関わる地割は、余芳園地（余芳の露地）、余芳周辺、北園池、権現山に大別されるが、『御城御庭絵図』と『尾二ノ丸御庭之図』とで、各地割における主な構成要素の形状や位置について大きな違いは見受けられない。

ア 地割毎の検証

【余芳園地】

余芳の平面構成や周辺に配置された手水、燈籠、袖垣、枝折戸、景石について2つの絵図では大きな違いは見受けられない。

【余芳周辺】

余芳周辺は、2つの絵図共に、飛石、延段、標柱が描かれており大きな違いは見受けられない。

【北園池】

護岸、中島、洲浜、飛石、木橋、石橋、沢飛石の形状や位置については、2つの絵図では大きな違いは見受けられない。

【権現山】

余芳周辺から権現山に至る園路の飛石範囲等の表現（飛石の有無、数や階段等の表現）が2つの絵図では異なるものの、地形及び園路の表現に大きな違いは見受けられない。

イ 構成要素毎の検証

地割毎の検証一方で、個々の構成要素を比較すると多くの異同があり、主に園路及び構造物で確認される。

『尾二ノ丸御庭之図』の修正時期を含め、『御城御庭絵図』との前後関係が不明確なところもあるため、異同箇所を構成要素別（植栽を除く）に検証する。

余芳園地、余芳周辺、北園池、権現山について『御城御庭絵図』に描かれている主な構成要素

【地形】	【建造物】
築山	茶亭（余芳）
園池	【構造物】
中島	石橋
【園路】	木橋
土系園路	枝折戸
飛石	袖垣
	【石造物】
	燈籠
	手水鉢
	標柱



図 3-1-4 余芳西側 『御城御庭絵図』部分（名古屋市蓬左文庫所蔵）

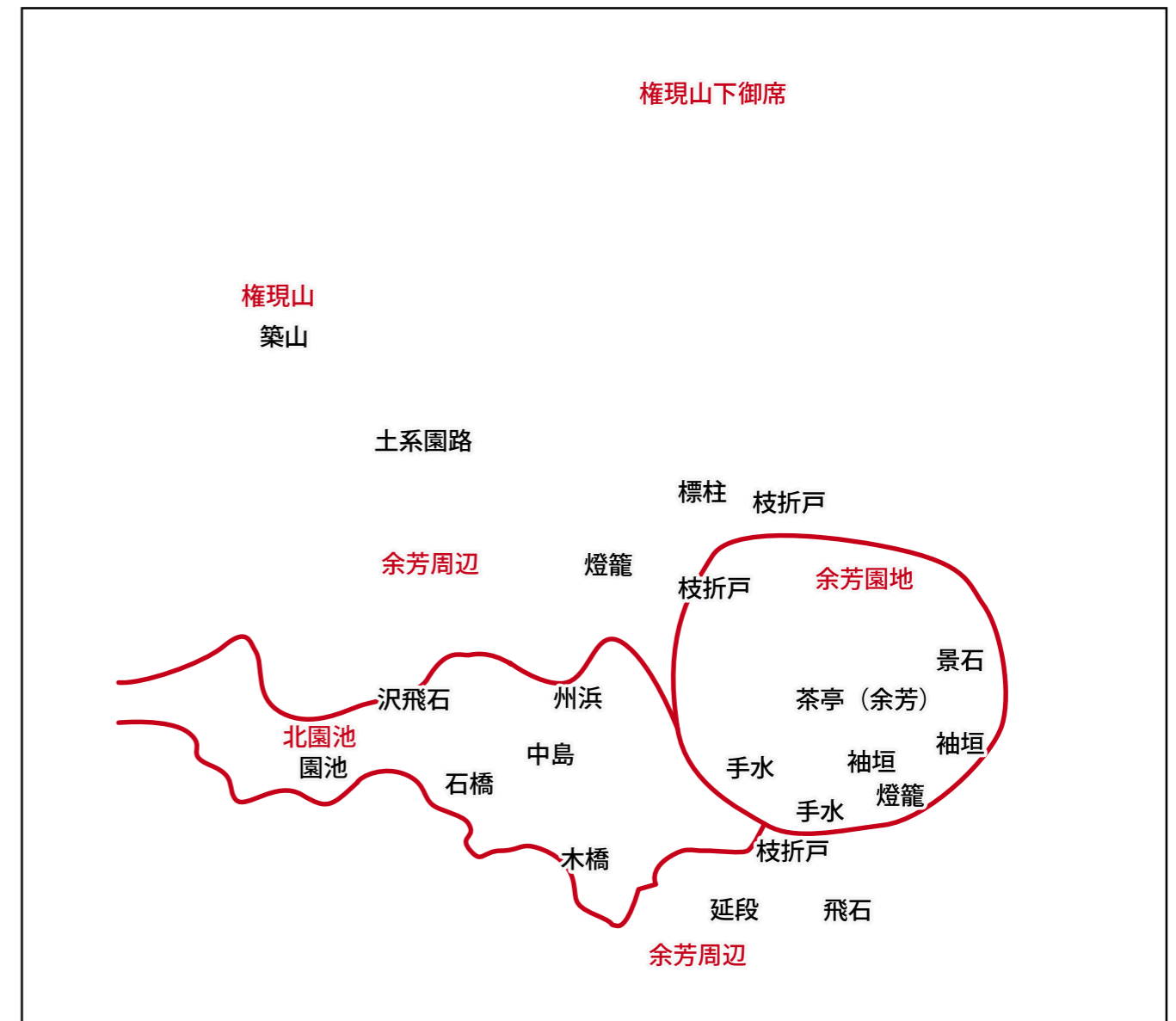


図 3-1-5 余芳西側 『尾二ノ丸御庭之図』部分（徳川美術館所蔵）

(4) 地割毎の発掘調査結果と絵図との比較検証

『御城御庭絵図』と発掘調査結果を比較し、地割毎の構成要素を確認した検証結果を下表のようにまとめた。今回の検討項目のうち、発掘調査結果を伴う要素は薄緑色着色、伴わない要素は薄水色着色で示した。

表 3-1-1 『御城御庭絵図』 と発掘踏査結果との比較表

庭園構成要素		『御城御庭絵図』	発掘調査結果	備考
ア 北園池	(ア) 石組護岸	石組	タタキと石組	
	(イ) 中島	石組	タタキと石組	
	(ウ) 州浜	中島の東側に白色の面的広がり	円礫群 範囲不明	
	(エ) 沢飛石	中島西側に8石	中島西側に9石	
	(オ) 木橋	太鼓橋 橋脚9本	橋脚4本 橋台	
	(カ) 石橋	二本橋	(不明)	
	(キ) 階段	段石	(不明)	
イ 余芳園地	(ク) 余芳	四畳半 南側に縁側	(不明)	※解体調査記録あり、今年度移築建設中
	(ケ) 飛石	飛石	(不明)	
	(コ) 築山と石組	余芳東側から北側の範囲	(不明)	
	(サ) 手水	六角型の立手水鉢	手水の基壇と思われる鉢状の構造物(タタキと石で構成)	
	(シ) 手水	六角型の立手水鉢	(不明)	
	(ス) 枝折戸	北側、西側、南側の3箇所	(不明)	
	(セ) 燈籠	燈籠	(不明)	
	(ソ) 袖垣	東側と西側の2箇所	(不明)	

庭園構成要素		『御城御庭絵図』	発掘調査結果	備考
ウ 余芳周辺	(タ) 飛石、延段	飛石、延段	(不明)	
	(チ) 燈籠	燈籠	(不明)	
	(ツ) 石組	石組	(不明)	※一部絵図を基に整備済
	(テ) 標柱	標柱	(不明)	
エ 権現山	(ト) 社	社	基壇状1箇所 区画状1箇所	
	(ナ) 鳥居	鳥居	礎石2箇所	
	(ニ) 起伏	小山の連なり	(不明)	※発掘調査結果を踏まえ絵図をもとに法面形成及び石組が整備済。
	(ヌ) 飛石	飛石	鳥居東側に9石	
	(ネ) 土系園路	土系園路	(不明)	
	(ノ) 階段	階段	階段跡	※発掘調査結果を踏まえ絵図をもとに階段整備済。



図 3-1-6 余芳西側『御城御庭絵図』部分 (名古屋市蓬左文庫所蔵)

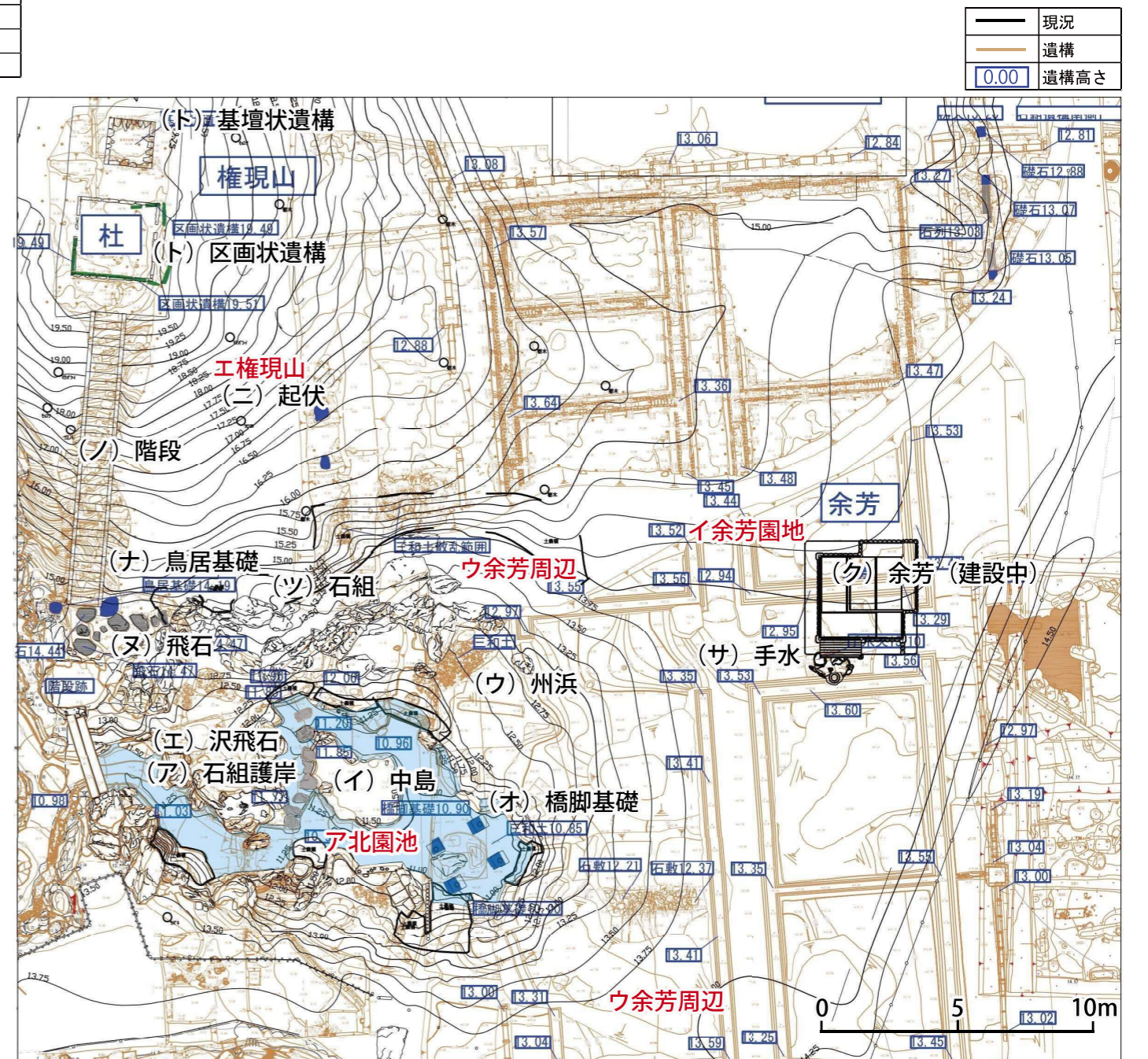


図 3-1-7 発掘調査結果・現況重ね合わせ図

3-2 地形及び園路

(1) 絵図の比較検証

ア 地形

『御城御庭絵図』と『尾二ノ丸御庭之図』を比較し、地形における検証結果を下表のようにまとめた。その結果、起伏部分の⑤と⑫とで、表現方法に違いがあることがわかった。

表 3-2-1 地形における『御城御庭絵図』と『尾二ノ丸御庭之図』との比較検証結果

事項	御城御庭絵図		尾二ノ丸御庭之図	
水面	①	着色で水面を表現	⑧	同左
中島	②	東側の一部に石組と植栽で中島を表現	⑨	同左
斜面石組	③	水面近くのエリアに小山のような表現と石組の連なりを組み合わせた傾斜地を表現	⑩	同左
植栽平坦部	④	着色で平坦部を表現	⑪	同左
起伏	⑤	小山の連なりで築山に起伏があることを表現	⑫	色の濃淡で傾斜地を表現
	⑥	園路のつづら折れで急傾斜を表現	⑬	同左
築山	⑦	余芳東側及び西側に濃い単色で小山の表現で築山を表現	⑭	同左

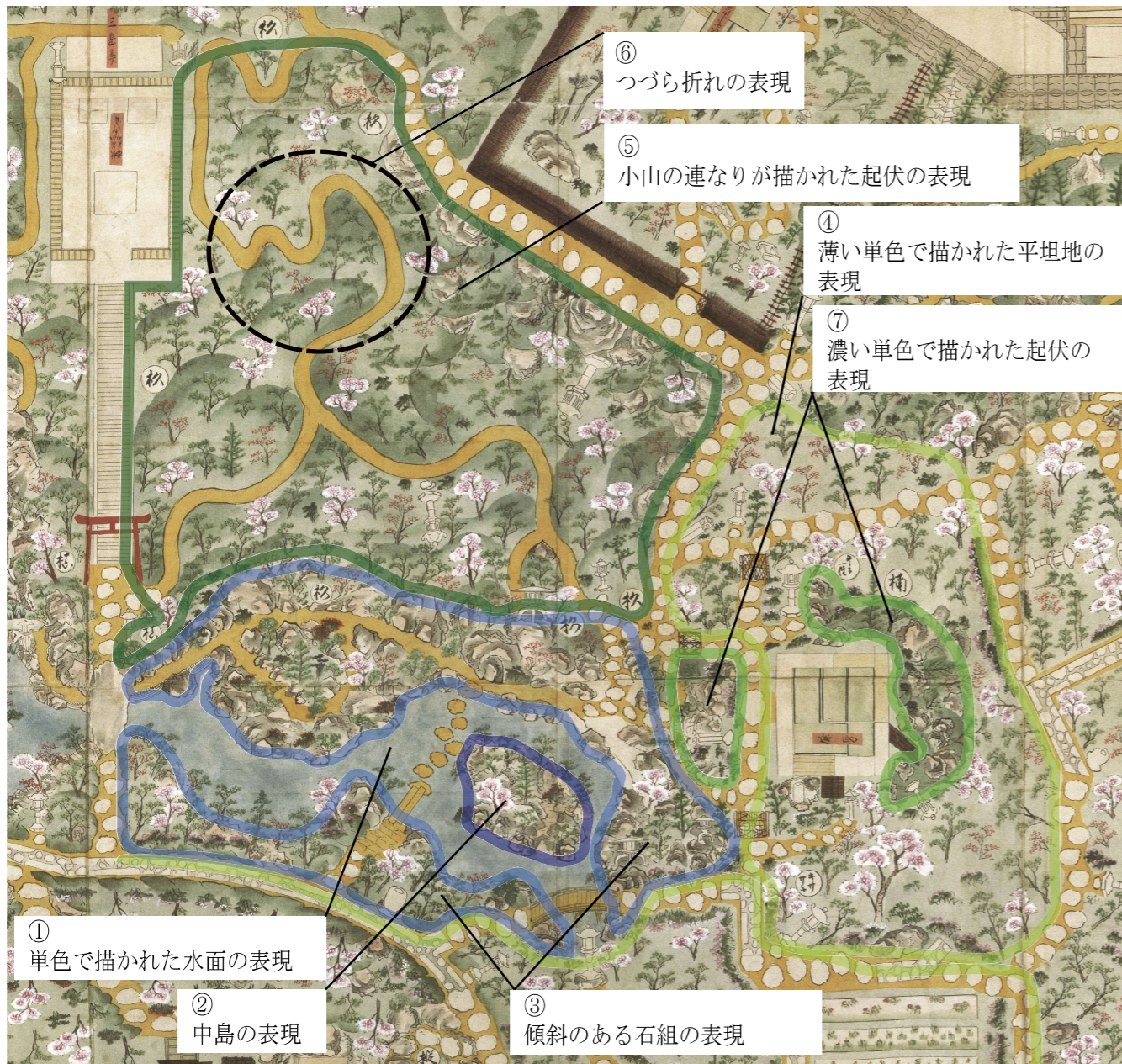


図 3-2-1 余芳西側 『御城御庭絵図』部分 (名古屋市蓬左文庫所蔵)

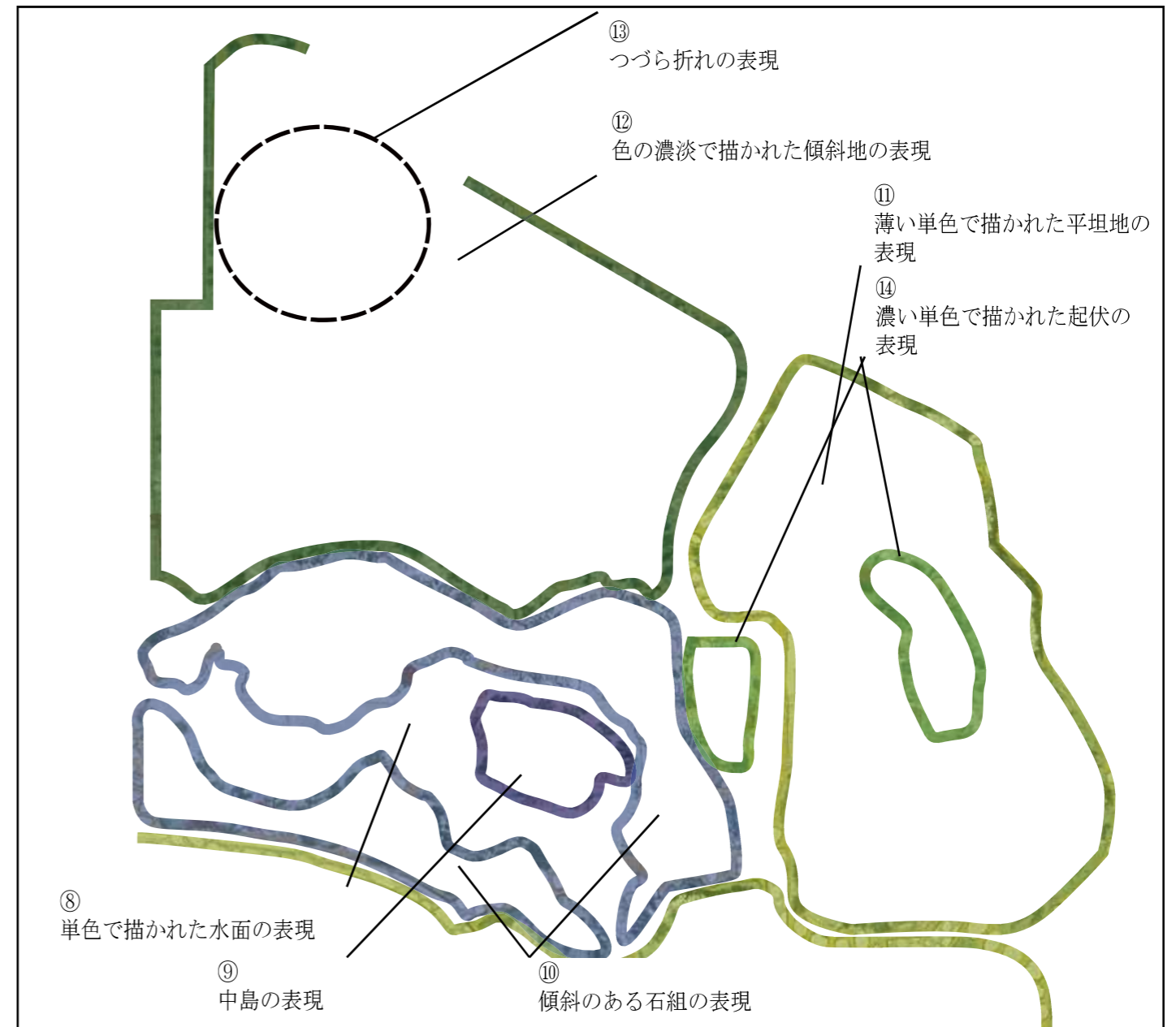


図 3-2-2 余芳西側 『尾二ノ丸御庭之図』部分 (徳川美術館所蔵)

イ 園路

『御城御庭絵図』と『尾二ノ丸御庭之図』比較し、園路における検証結果を下表のようにまとめた。その結果、勾配のある土系園路の②と⑧⑨、延段の⑥と⑫とで、表現方法に違いがあることがわかった。

表 3-2-2 園路における『御城御庭絵図』と『尾二ノ丸御庭之図』との比較検証結果

事項	御城御庭絵図		尾二ノ丸御庭之図	
土系園路（平坦）	①	着色で土を叩いた平坦な園路を表現	⑦	同左
土系園路（勾配有）	②	アを踏まえ、着色で緩勾配の園路を表現	⑧	同左
			⑨	園路上の横線で急勾配もしくは山間の園路を表現
階段	③	①②と同じ着色で階段状の構造物を表現	⑩	同左
飛石及び石段	④	大きさは様々だが、形状は丸みを帯びた雲形、色は白色で表現	⑪	同左
	⑤	ア及び⑨を踏まえ、石段を表現		
延段	⑥	黒線の外枠の中に丸みを帯びた多角形と長方形の石は白色で、石の間は薄灰色で表現	⑫	⑥と石の配置が異なる表現

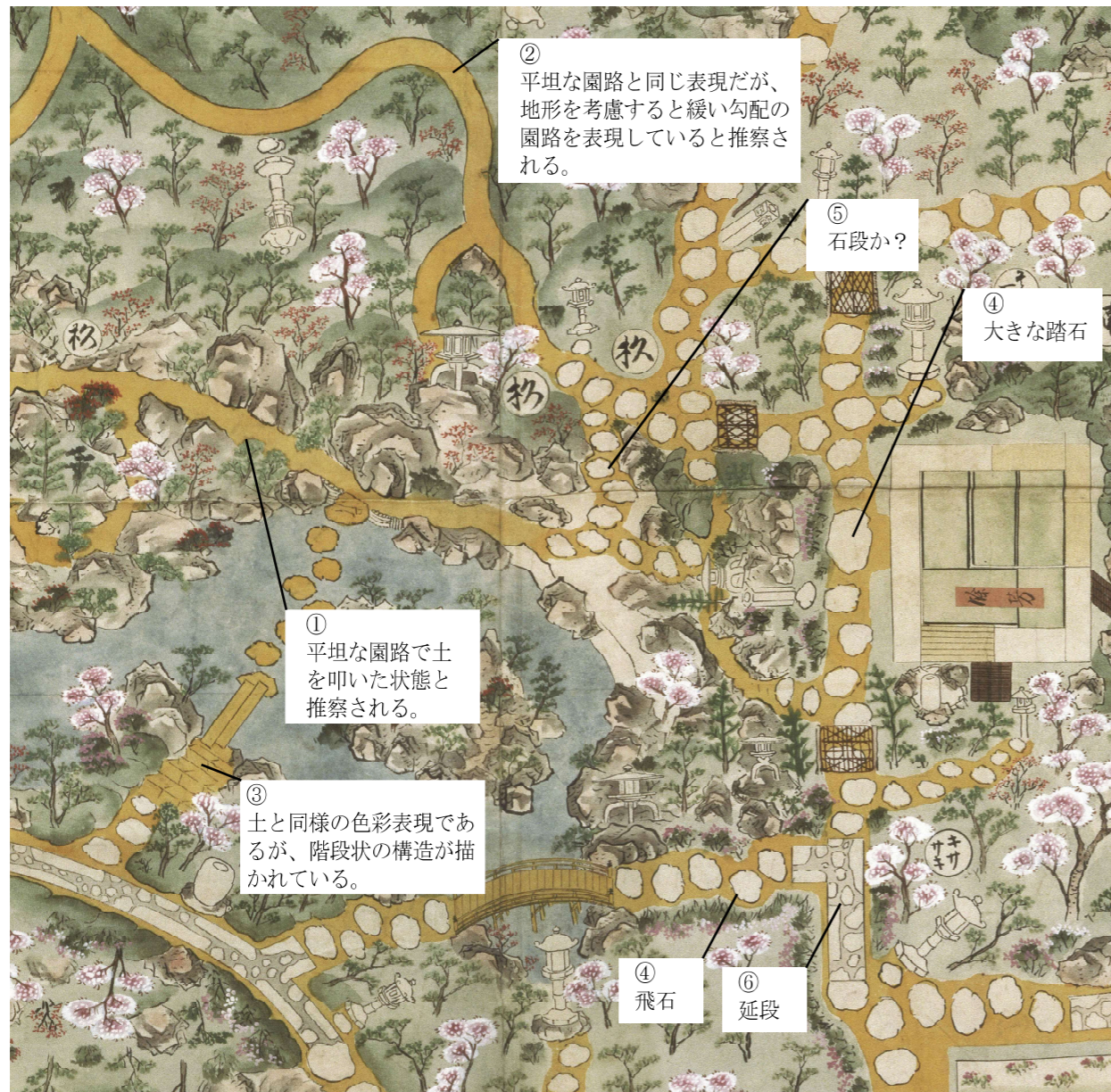


図 3-2-3 余芳西側 『御城御庭絵図』部分（名古屋蓬左文庫所蔵）

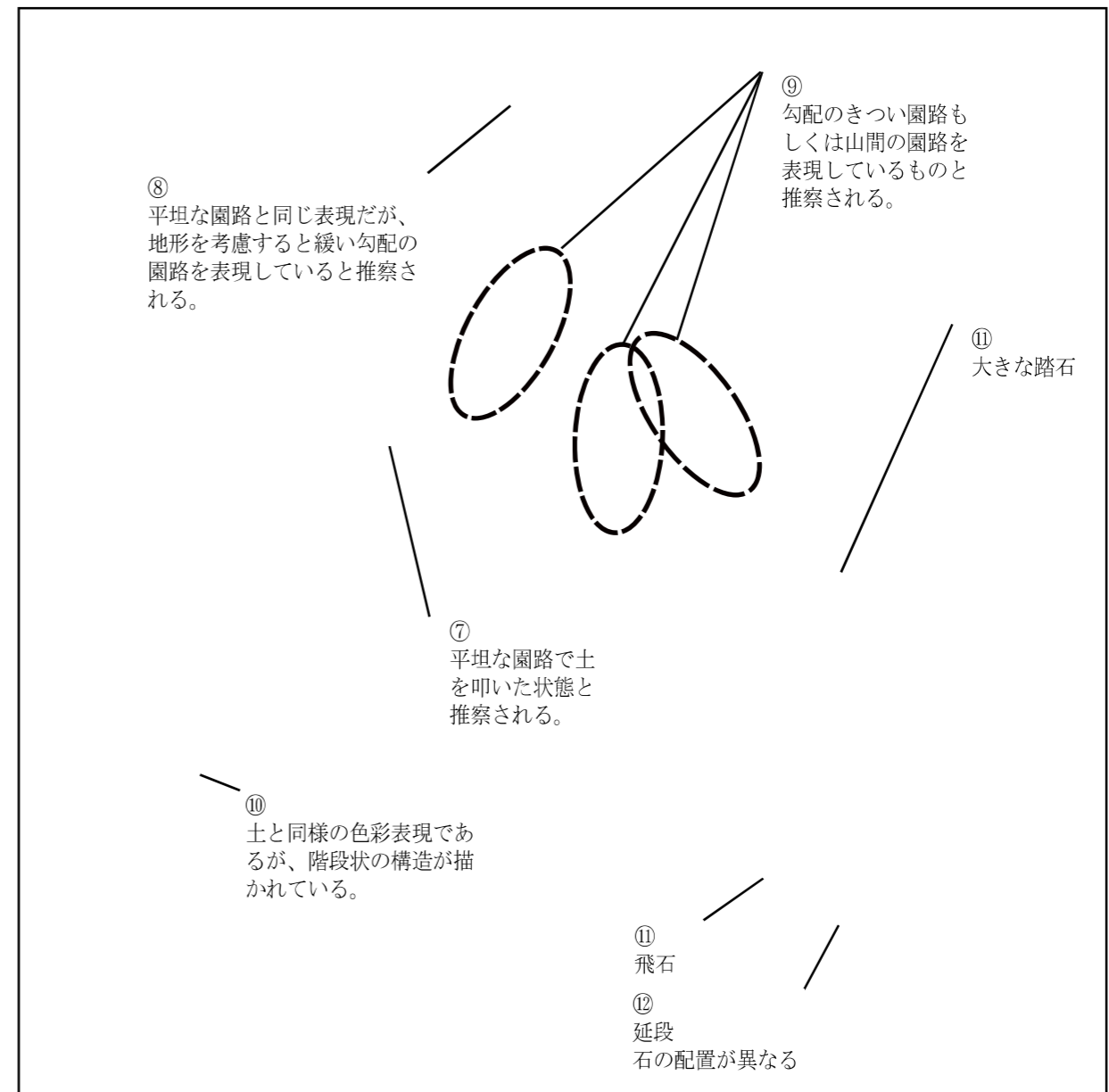


図 3-2-4 余芳西側 『尾二ノ丸御庭之図』部分（徳川美術館所蔵）

(2) 絵図と発掘調査結果の検証

『御城御庭絵図』と発掘調査結果を比較し、地形に関する検証結果を下表のようにまとめた。その結果、北園池が強調して描かれる等絵図と遺構に違いがあることがわかった。

表 3-2-3 地形における『御城御庭絵図』と発掘調査結果との比較検証結果

事項		検証結果
ア 地形		
北園池の描き方	護岸線	・絵図は遺構に比べて東西方向に長い ・中島とその西側の半島状に突き出た箇所について、絵図は遺構に比べて伸びやかな表現
	余芳と北園池との距離	・絵図は遺構に比べて距離が短い
	護岸	・絵図は遺構に比べて護岸の石やタタキ造作物を複数表現
石組斜面部(北)	(オ) (ウ) (キ) の位置	・絵図と遺構を比べて概ね差はない
石組斜面部(南)	護岸石組の範囲	・絵図と遺構を比べて概ね差はない

事項		検証結果
イ 余芳と木橋の方向		(ケ) 木橋中心線 ・絵図は遺構に比べて南側に逸れる
ウ 余芳と階段の方向		(イ) 柱中心線と (エ) 階段中心線 ・絵図はいずれも真北を向くが、遺構は絵図に比べて階段が東に振れている
エ 沢飛石の方向		(カ) の始点と終点の線 ・遺構は絵図に比べてやや北の方向を向く



図 3-2-5 余芳西側 『御城御庭絵図』部分 (名古屋市蓬左文庫所蔵)

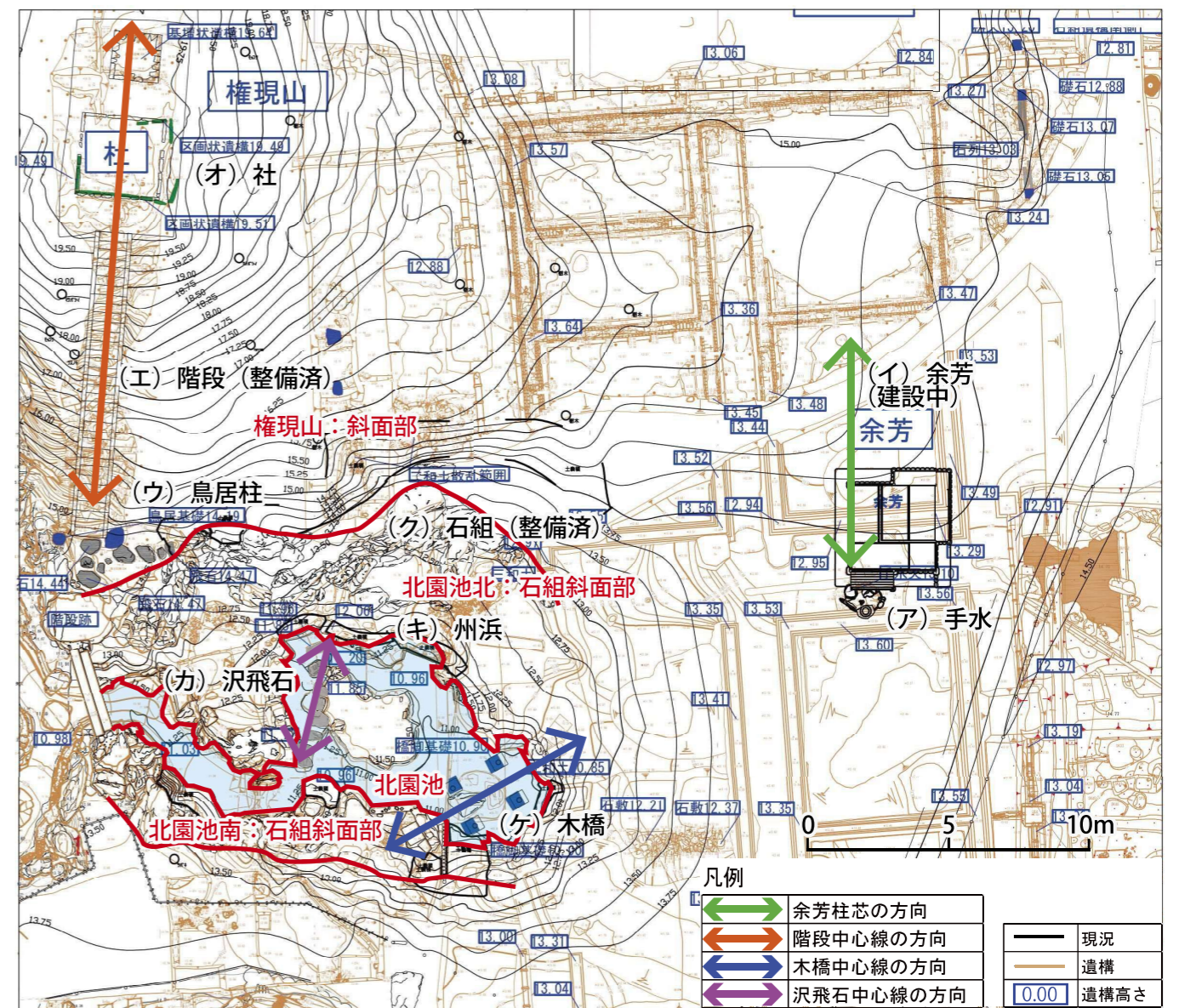
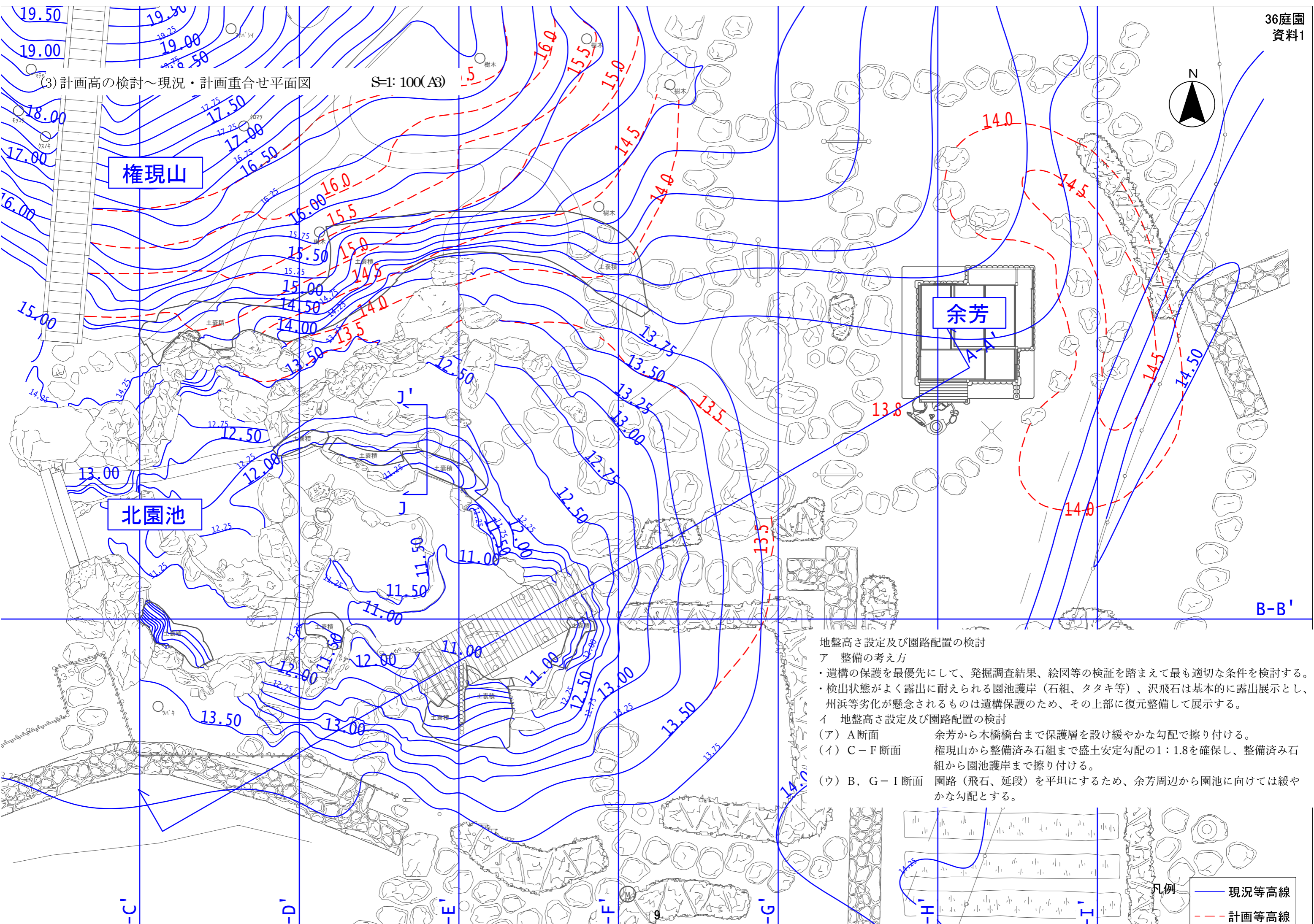


図 3-2-6 発掘調査結果・現況重ね合わせ図

(3) 計画高の検討～現況・計画重合せ平面図

S=1: 100(A3)



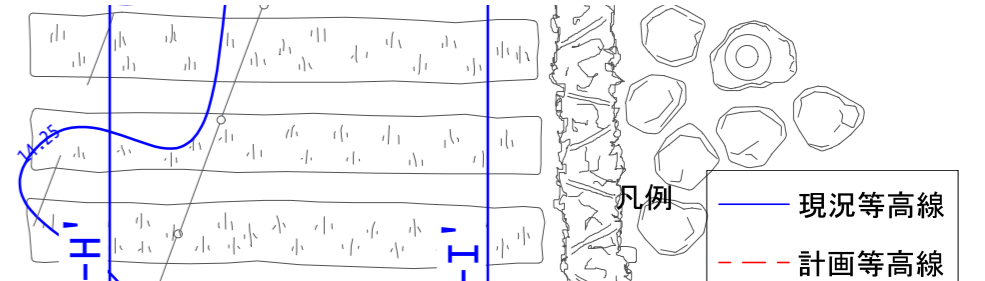
地盤高さ設定及び園路配置の検討

ア 整備の考え方

- ・遺構の保護を最優先にして、発掘調査結果、絵図等の検証を踏まえて最も適切な条件を検討する。
- ・検出状態がよく露出に耐えられる園池護岸（石組、タタキ等）、沢飛石は基本的に露出展示とし、州浜等劣化が懸念されるものは遺構保護のため、その上部に復元整備して展示する。

イ 地盤高さ設定及び園路配置の検討

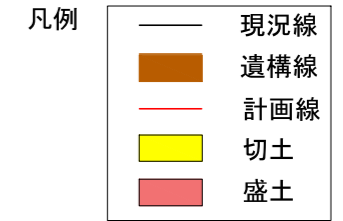
- (ア) A断面 余芳から木橋橋台まで保護層を設け緩やかな勾配で擦り付ける。
- (イ) C-F断面 権現山から整備済み石組まで盛土安定勾配の1:1.8を確保し、整備済み石組から園池護岸まで擦り付ける。
- (ウ) B、G-I断面 園路（飛石、延段）を平坦にするため、余芳周辺から園池に向けては緩やかな勾配とする。



凡例

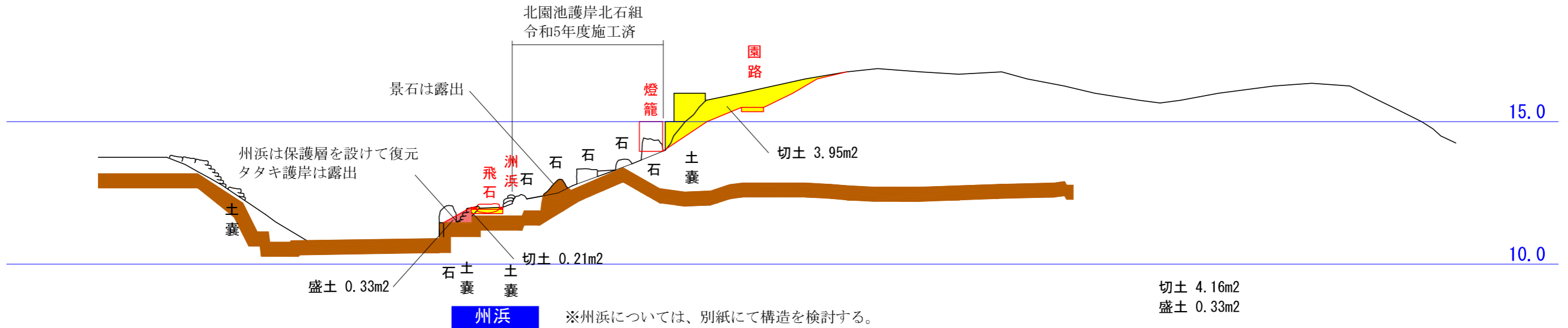
- 現況等高線
- - - 計画等高線

(4) 計画高の検討～現況・遺構・計画重ね合せ断面図 ーウ S=1:150 (A3)



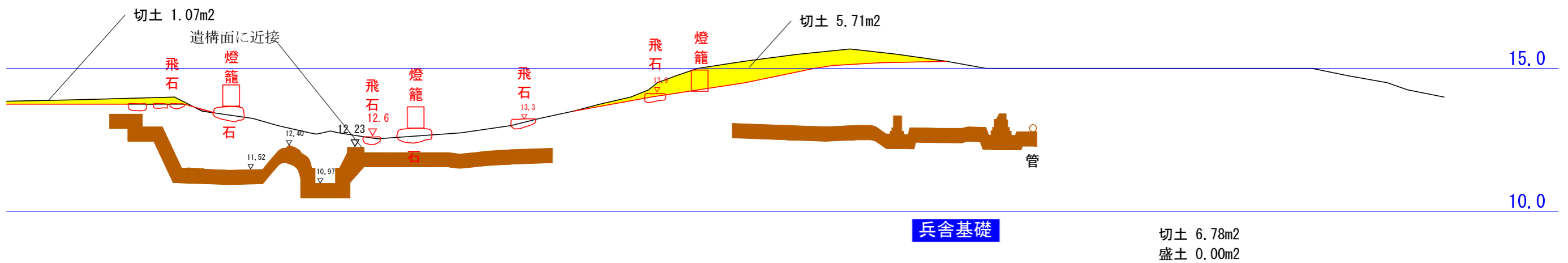
E-E' 断面図

20.0



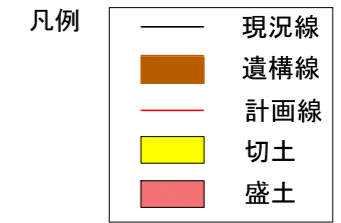
F-F' 断面図

20.0

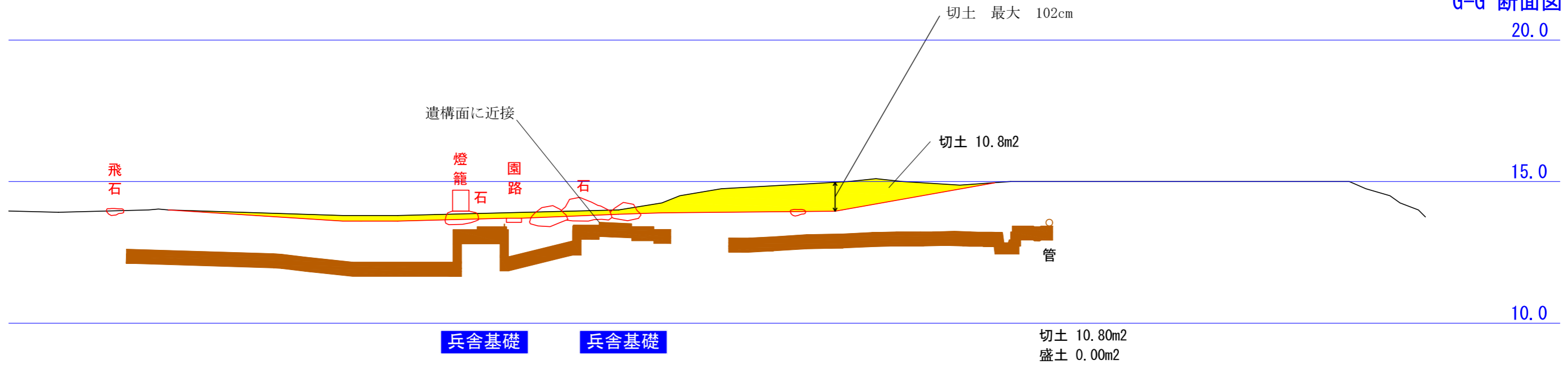


S=1:150

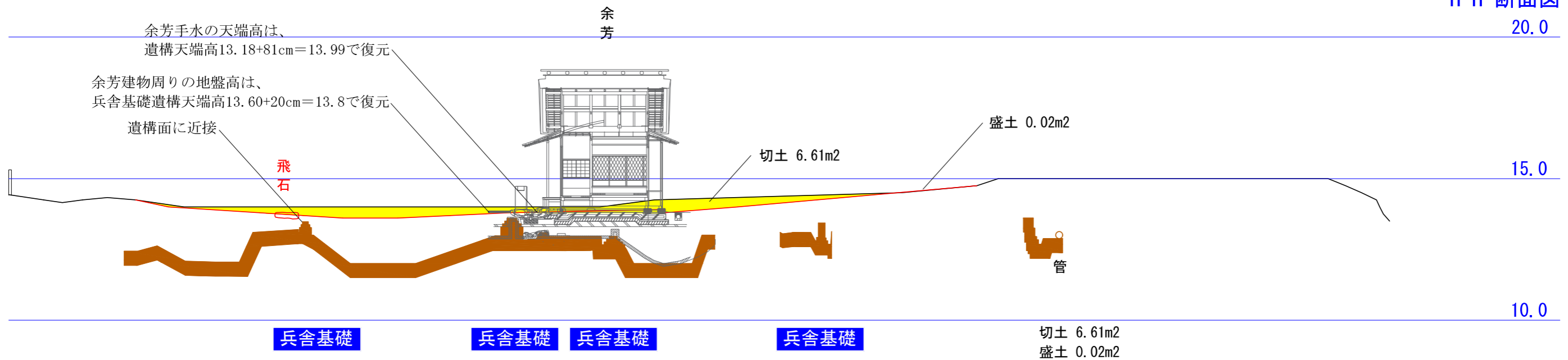
(4) 計画高の検討～現況・遺構・計画重ね合せ断面図 一エ S=1:150 (A3)



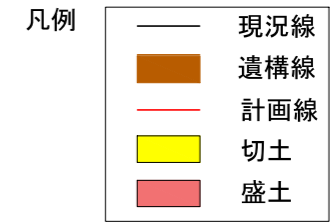
G-G' 断面図
20.0



H-H' 断面図
20.0

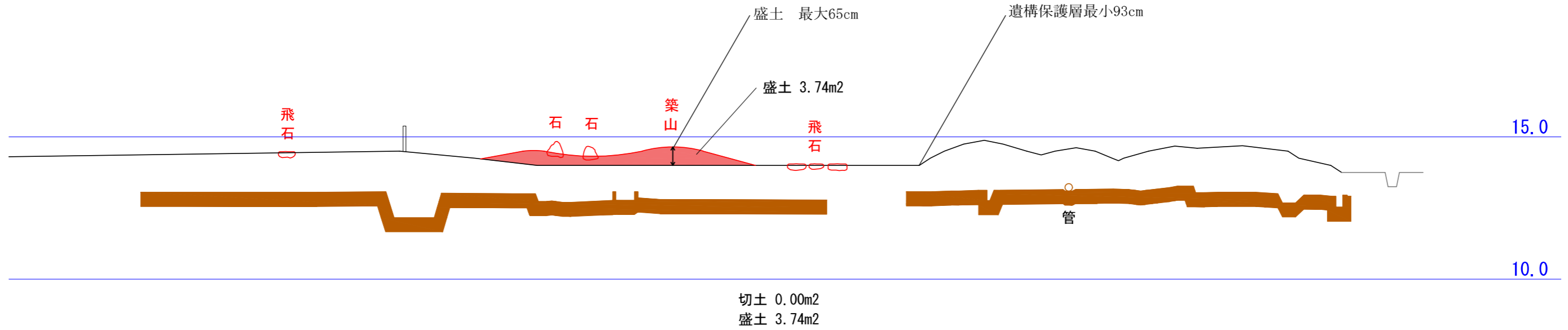


(4) 計画高の検討～現況・遺構・計画重ね合せ断面図 一才 S=1:150 (A3)



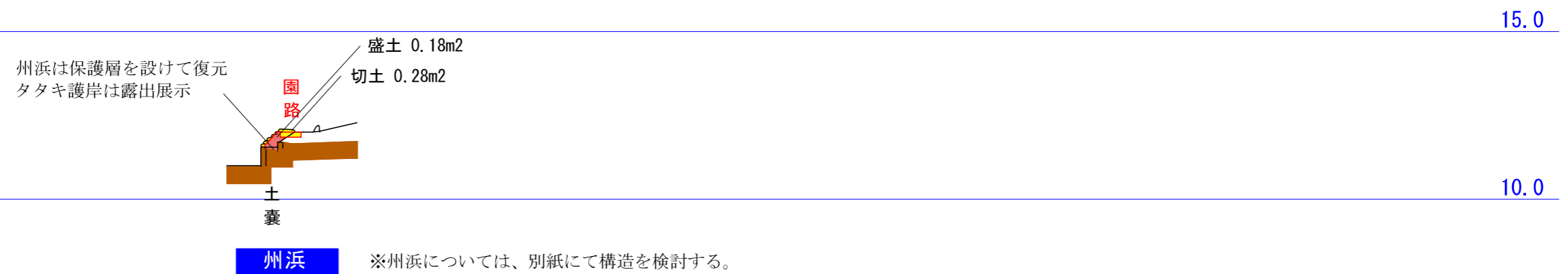
I-I' 断面図

20.0



J-J' 断面図

20.0



S=1:150



10m

(5) 修復計画平面図



凡例

現況高	0.00
計画高	0.00

(6) 構造の検討

遺構が確認されていないため、二之丸庭園内他エリアでの検出遺構と『御城御庭絵図』を表3-2-2及び表3-2-3のように比較し、検証結果を下表の表3-2-4のようにまとめた。その結果、絵図は庭園の実態を概ね反映しているものと考えた。

ア 飛石

表 3-2-4 飛石における『御城御庭絵図』と発掘調査結果との比較検証結果

事項	絵図	検出遺構	検証結果
余芳園地	御城御庭絵図	多春園	<ul style="list-style-type: none"> ・絵図と遺構の配列は概ね一致 ・遺構について、石材の形状や化粧三和土、玉石敷等絵図にない要素の組み合わせで施工されている ・石材について形状や石質が複数あるため、建物周辺を描いた『桜御間南御庭四季之図』をあわせて構造検討し、補足することとする
余芳園地北(平坦部)、余芳園地南(平坦部) 北園池北(石組斜面部)、北園池南(石組斜面部)、権現山(斜面部)		権現山南部 二子山	<ul style="list-style-type: none"> ・絵図と遺構の配列は概ね一致 ・数や形状、配列間隔に違いがあるが、多春園ほど変化に富んでいない



写真3-2-1 多春園(多-04)土間状遺構・飛び石列検出状況(南から)

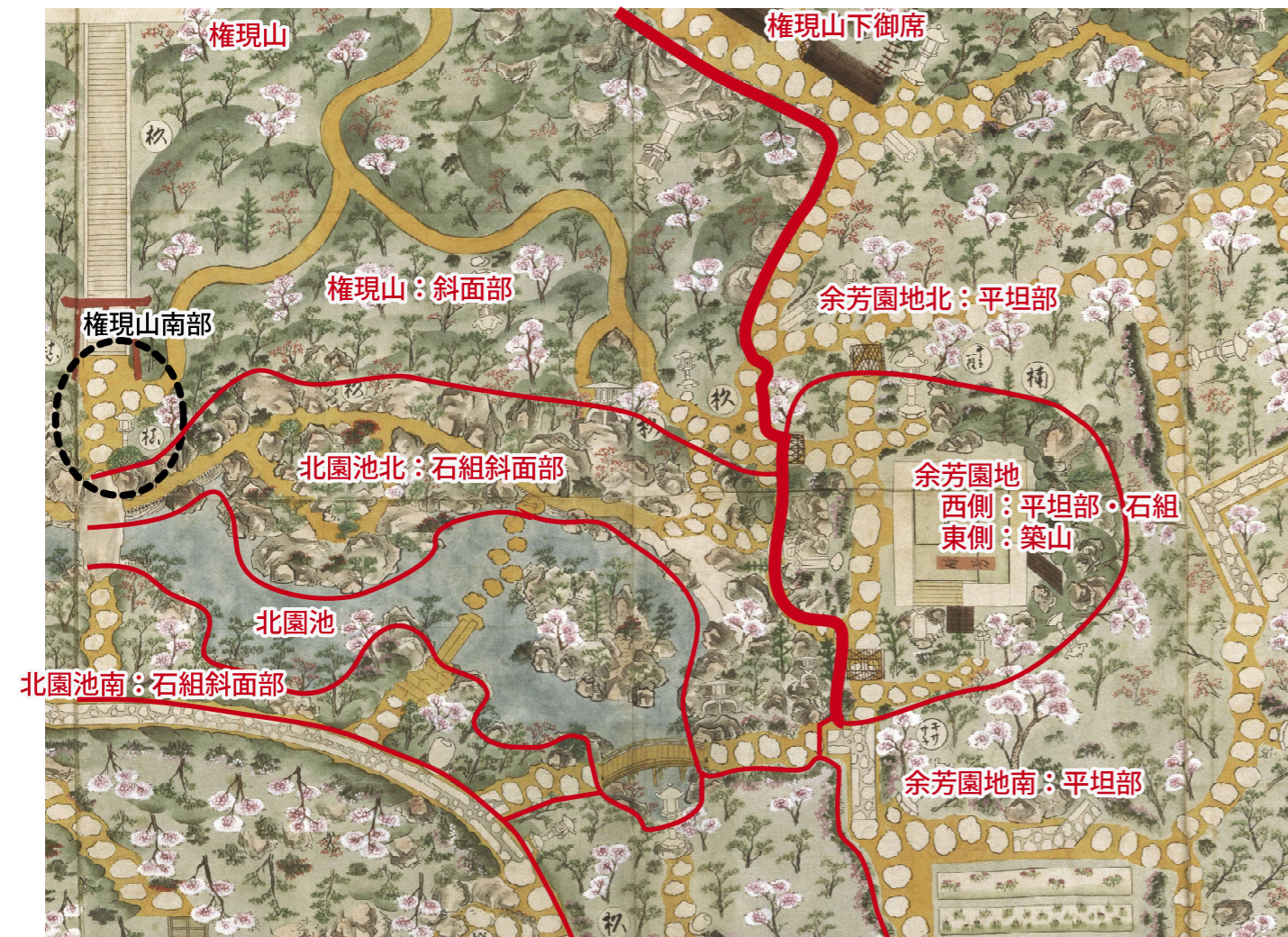


図 3-2-7 余芳西側『御城御庭絵図』部分(名古屋市蓬左文庫所蔵)

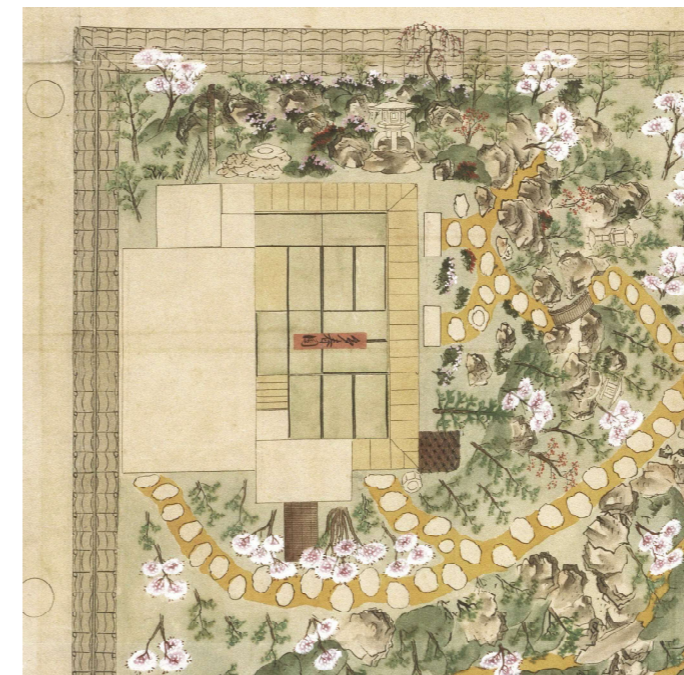


図 3-2-8 多春園『御城御庭絵図』部分(名古屋市蓬左文庫所蔵)

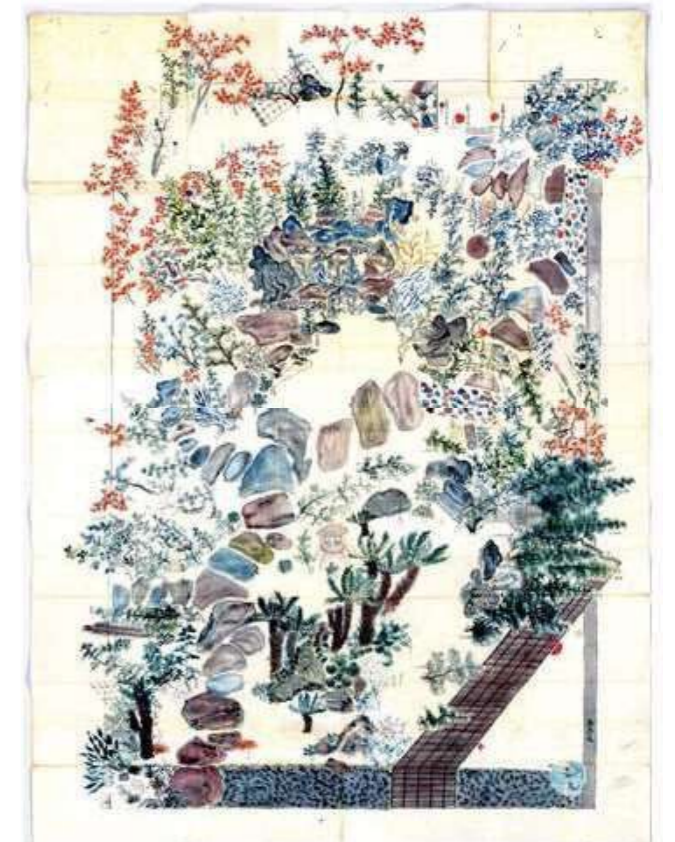


図3-2-9 『桜御間南御庭四季之図』(名古屋市蓬左文庫所蔵)

表3-2-5 飛石における『御城御庭絵図』と発掘調査結果との比較検証結果（多春園、権現山南部）

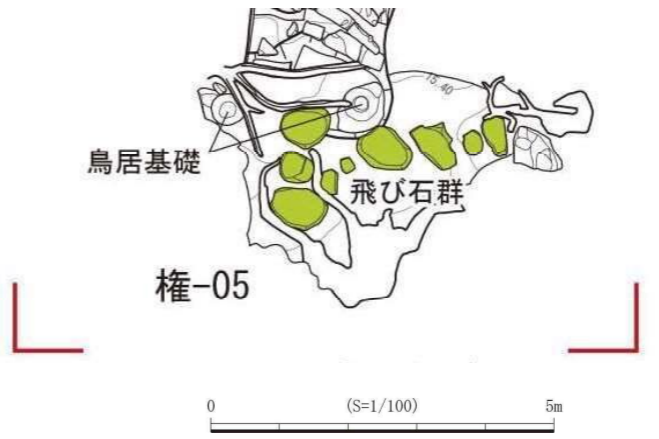

		多春園	権現山南部
空間性の特徴		多春園は、二之丸庭園の北西部に文政期に建てられた茶席である。『御城御庭絵図』には多春園の周囲に、茶席へ至る園路や池それを越える橋などの表現が認められる。	権現山は、初代藩主義直によって元和期に造営された築山である。絵図等の検討から、少なくとも十代藩主斉朝の文政期の整備の際には、園路の付け替えや頂部に社を設けたりするなど改変が加わっていることが明らかとなっている。山裾の鳥居付近、余芳へとつながる園路上で飛び石が発掘されている。
発掘調査結果	考察	『御城御庭絵図』等には、園路に多くの飛び石が描かれているが、実際に調査の中で確認できた飛び石列は多くなく、二之丸庭園においては貴重な事例である。化粧三和土遺構に埋め込まれた飛び石から連続して、飛び石を13基検出した。『御城御庭絵図』に蛇行して描かれた飛び石と酷似しており、絵図とほぼ変わらない配置状況であったと考えられる。飛び石列の南側では玉石が確認できず、また絵図では飛び石が榮螺山との境界のように描かれていることから、榮螺山の麓はこの近くまで広がっていた可能性が考えられる。飛び石は調査区の東側にも広がっていたと推測される。	鳥居基礎の南側では、飛び石を9基検出した。鳥居の前から南へ3基、そこから東へ6基配列されている。『御城御庭絵図』では鳥居から南へ5基、その真ん中の飛び石から東へ2基描かれている。これらの飛び石は掘り形を確認することができたものの遺物等の出土が確認できなかった。よって、明治期以降に行われた改修の可能性も考えられ、文政期の原位置かどうか判断するのは困難であったが、『御城御庭絵図』等の絵図に描かれる状況とほぼ一致をする。
	石の寸法	円形、多角形 φ230×370～φ430×560	円形 φ200～φ600×700
	石の配列	間隔は概ね10～15cm程度であるが、10cm以下のものも存在する。	間隔は概ね10～15cm程度であるが、10cm以下のものも存在する。
	石材	河戸石（硬質砂岩）が4石、花崗岩が5石、花崗閃緑岩が1石、チャートが2石といった具合に、何種かの石材が混在している。	砂岩、花崗岩他
史料及び発掘調査結果		 <p>図3-2-10 多春園 『御城御庭絵図』部分90°左回転（名古屋市蓬左文庫所蔵）</p>	 <p>図3-2-13 権現山南部 『御城御庭絵図』部分（名古屋市蓬左文庫所蔵）</p>
		 <p>図3-2-11 多春園 遺構平面図 部分</p>	 <p>図3-2-14 権現山 遺構平面図 部分</p>
		 <p>図3-2-12 多春園 オルソ画像 部分</p>	 <p>図3-2-15 権現山 オルソ画像 部分</p>
			 <p>写真3-2-2 権現山（権-05）鳥居基礎・飛び石列検出状況（北から）</p>

表3-2-6 飛石における『御城御庭絵図』と発掘調査結果との比較検証結果（二子山）

		二子山南西部
空間性の特徴		二子山は、栄螺山と権現山に挟まれた位置に、文政期に造営された築山である。『御城御庭絵図』には、山には石が据えられ、蘇鉄が生える状況が描かれる。山裾部で飛び石が発掘されている。
発掘調査結果	考察	調査では2箇所飛び石列を確認した。二-02区では、北東-南西方向に3基並ぶ飛び石列を検出した。これらの飛び石は、北東に向かって階段状に上っていく様相が確認できた。この階段を上っていくと、権現山の山裾方向に到る事ができる。『御城御庭絵図』には二子山の東側で、園路が山の裏手に回り込んでいるように描かれている飛び石列があり、園路に高低差があるように見える。階段状の飛び石はこの位置にあたる可能性が考えられる。 二-03区では、南北方向に4基並ぶ飛び石列を検出した。二-02区の飛び石列とは反対に、南に向かってわずかながら上っていく様相が確認できた。ここから二子山の東側は高低差が付けられており、絵図にもその様相が描かれていることが推察できる。
	石の寸法	二-02区：方形18×28cm、20×34cm 二-03区：円形φ50×60cm、方形38×48cm、28×85cm
	石の配列	二-02区：間隔は概ね20cm程度である。 二-03区：間隔は概ね15cm程度である。
	石材	不明

【飛石の構造検討】

(ア) 修理方針

- a 余芳園地
- ・多春園及び桜御間南御庭を参考に変化に富む石材を選定し、配列する。
 - ・役石と考えられる大きく描かれた石とそれ以外の石で形状、配列、石材に変化をもたせる。
- b 余芳園地北及び南、北園池北及び南、権現山
- ・地形に合わせ形状や大きさを選定し、大きさは、概ねφ400~700程度、配列間隔は10~15cm程度とする。

(イ) 修理方法

- ・飛石は土極めに打ち、必要に応じてかませ石で安定化させる。
- ・高低差のある箇所において、蹴上高は10~20cm程度とする。

史料及び
発掘調査
結果



図3-2-16 二子山
『御城御庭絵図』部分（名古屋市蓬左文庫所蔵）



(上) 写真3-2-3 二子山（二-03）飛び石列検出状況（北から）



(下) 写真3-2-4 二子山（二-02）飛び石列検出状況（東から）

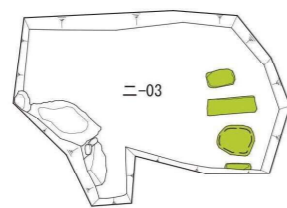
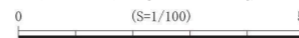


図3-2-17 二子山 遺構平面図 部分



図3-2-18 二子山 オルソ画像 部分

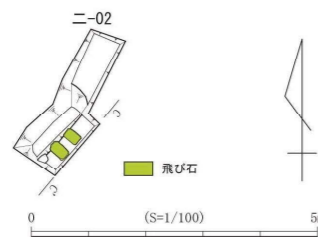
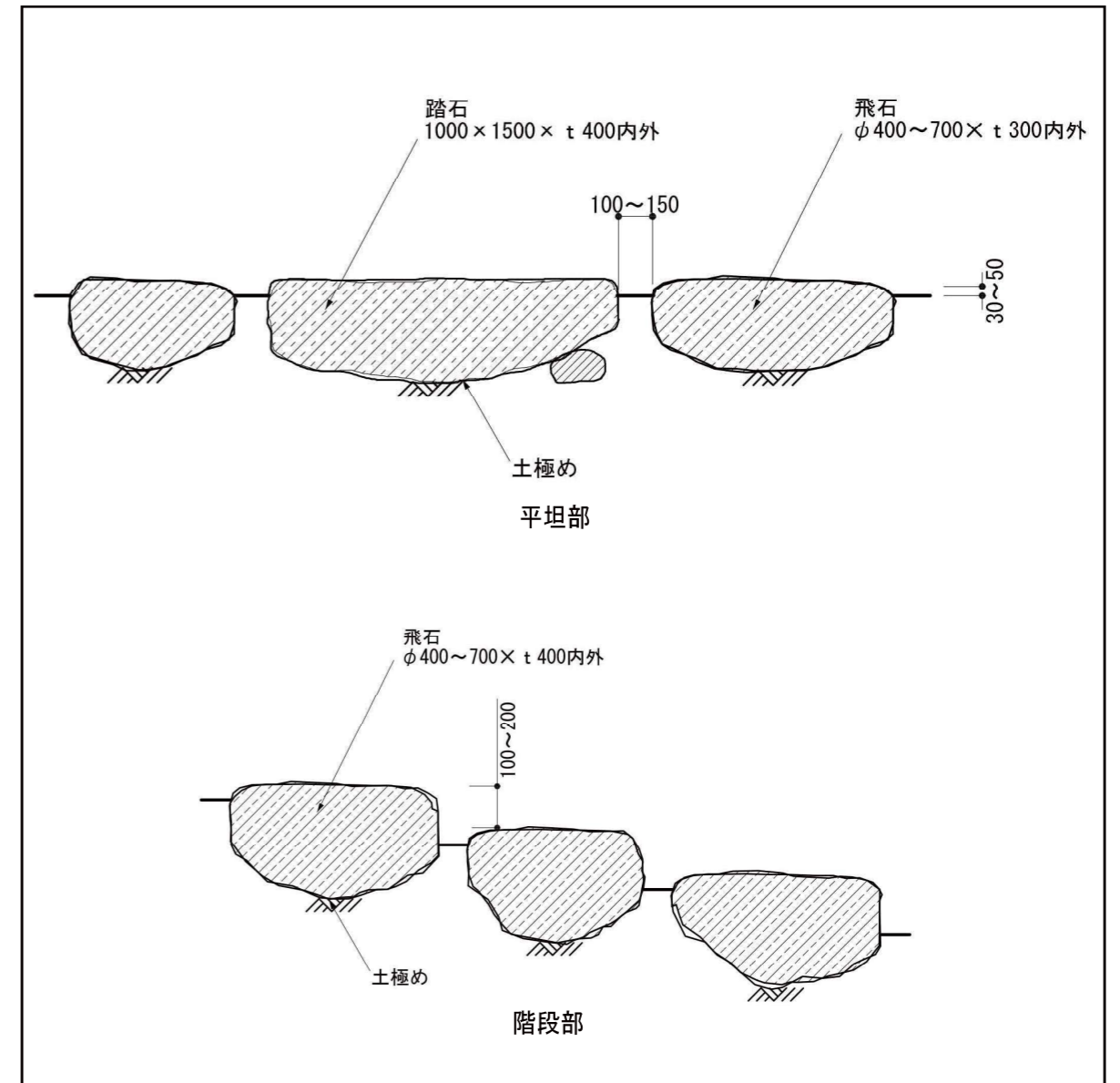


図3-2-17 二子山 遺構平面図 部分



図3-2-18 二子山 オルソ画像 部分

構造図 S=1:20

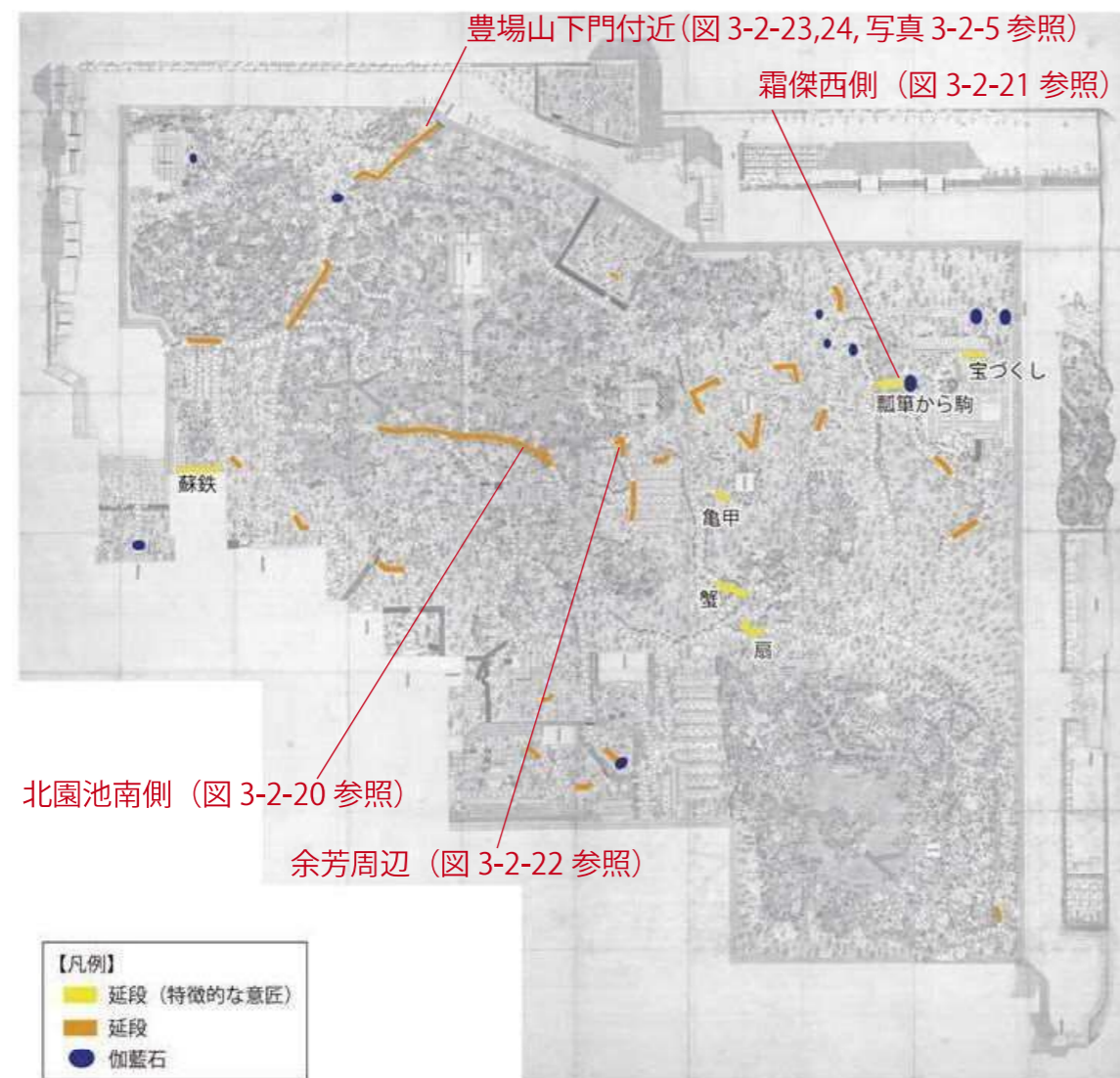


イ 延段

遺構が確認されていないため、二之丸庭園内で唯一検出された検出遺構と『御城御庭絵図』を比較し、検証結果を下表のようにまとめた結果、絵図は庭園の実態を概ね反映しているものと考えた。

表 3-2-7 延段における『御城御庭絵図』と発掘調査結果との比較検証結果

事項	絵図	検出遺構
豊場山下門	・切石の長さ、平石、玉石、飛石との組み合わせによる変化を表現	・形状：1,200*6,000 ・石材：切石 250*900 内外、40*100 内外、40 内外*不明 平石Φ300*700 内外 玉石Φ200~350 内外
備考	・絵図全体では、「瓢箪から駒等特徴的な意匠表現」と「様々な形状の石材の組み合わせによる表現」の2種あり、本項は後者に該当	



下図：『御城御庭絵図』（名古屋市蓬左文庫所蔵）

図3-2-19 延段及び伽藍石配置図（整備計画書より 赤字赤線加筆）



図3-2-20 北園池南側『御城御庭絵図』部分(名古屋市蓬左文庫所蔵)



図3-2-21 霜傑西側『御城御庭絵図』部分(名古屋市蓬左文庫所蔵)



図3-2-22 余芳周辺『御城御庭絵図』部分(名古屋市蓬左文庫所蔵)

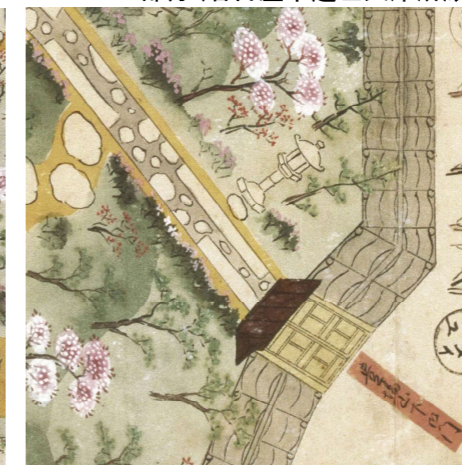


図3-2-23 豊場山下門付近『御城御庭絵図』部分右90°回転(名古屋市蓬左文庫所蔵)

【延段の構造検討】

(ア) 修理方針

- ・豊場山下門付近の検出遺構を参考に石材を選定する。
- ・大きさは、概ね幅1m程度、長さ3.7m程度とする。

(イ) 修理方法

- ・石材は碎石路盤上にタタキにて固定する。目地は深目地とする。

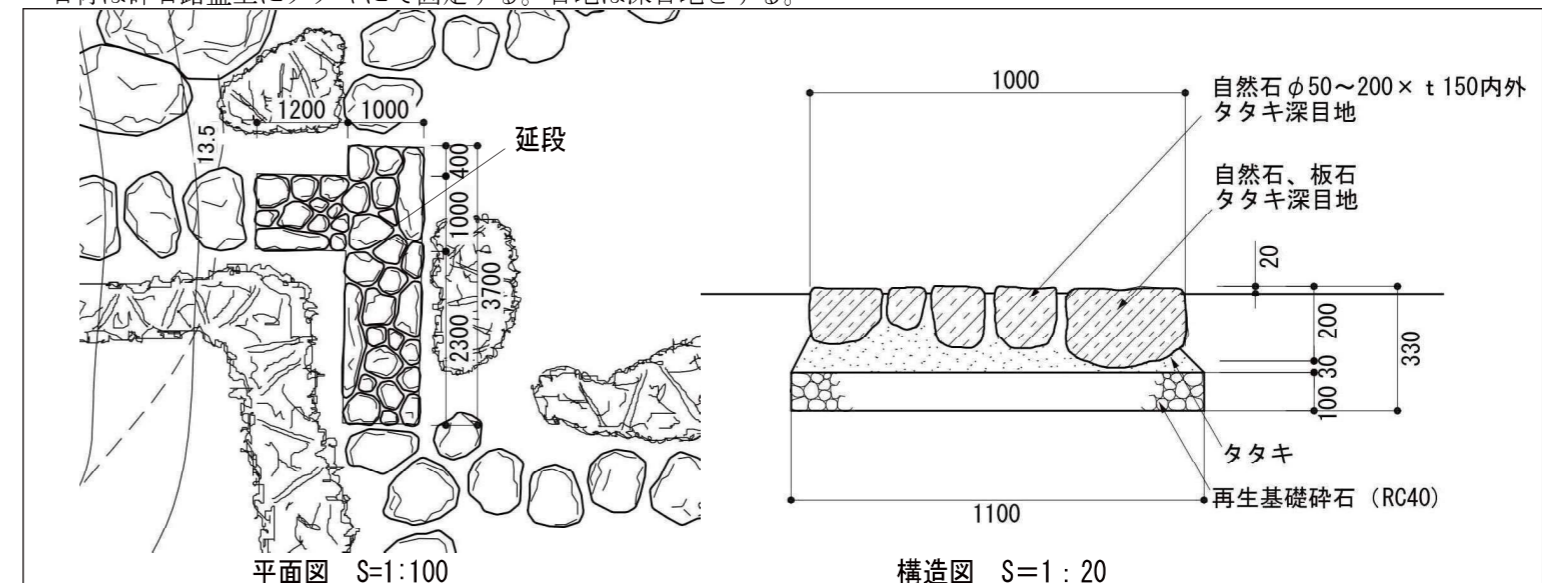


図3-2-24 豊場山下門付近 遺構平面図 部分



写真3-2-5 豊場山下門付近 遺構写真

3-3 沢飛石

(1) 絵図の比較検証

『御城御庭絵図』と『尾二ノ丸御庭之図』を比較し、沢飛石の検証結果を下表のようにまとめた。その結果、北側護岸に接した飛石に関する③と⑨とで、表現方法に違いがあることがわかった。

表 3-3-1 沢飛石における『御城御庭絵図』と『尾二ノ丸御庭之図』との比較検証結果

事項	御城御庭絵図	尾二ノ丸御庭之図
沢飛石	① 8石、着色、千鳥打ちと三連打ちの組み合わせの表現	⑦ 同左
	② 北へ向かっての沢飛石からの視線上石組越しに雪見燈籠が位置する表現	⑧ 同左
	③ 凹凸のある形状の1石目が園路に接し、その両側に造形物を表現	⑨ 凹凸のある形状の1石目が園路に接し、その両側は不明
	④ 5石目が中島に接する評点	⑩ 同左
	⑤ 5石目が西側の半島状箇所の護岸から離れた表現	⑪ 同左
	⑥ 8石目は南西方向に架かる橋に連なり、飛石を橋台とする表現	⑫ 同左

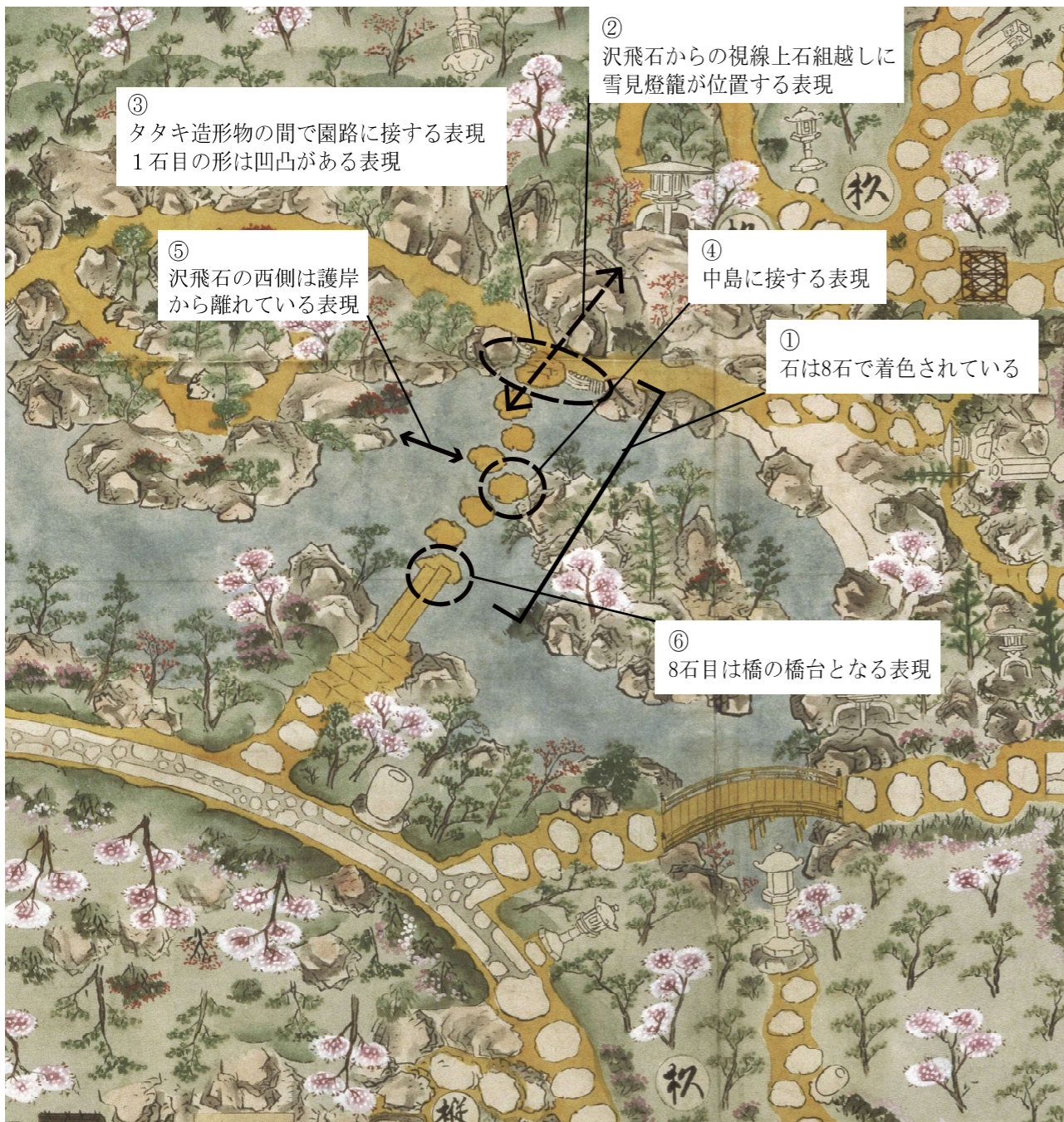


図 3-3-1 沢飛石 『御城御庭絵図』部分 (名古屋市蓬左文庫所蔵)

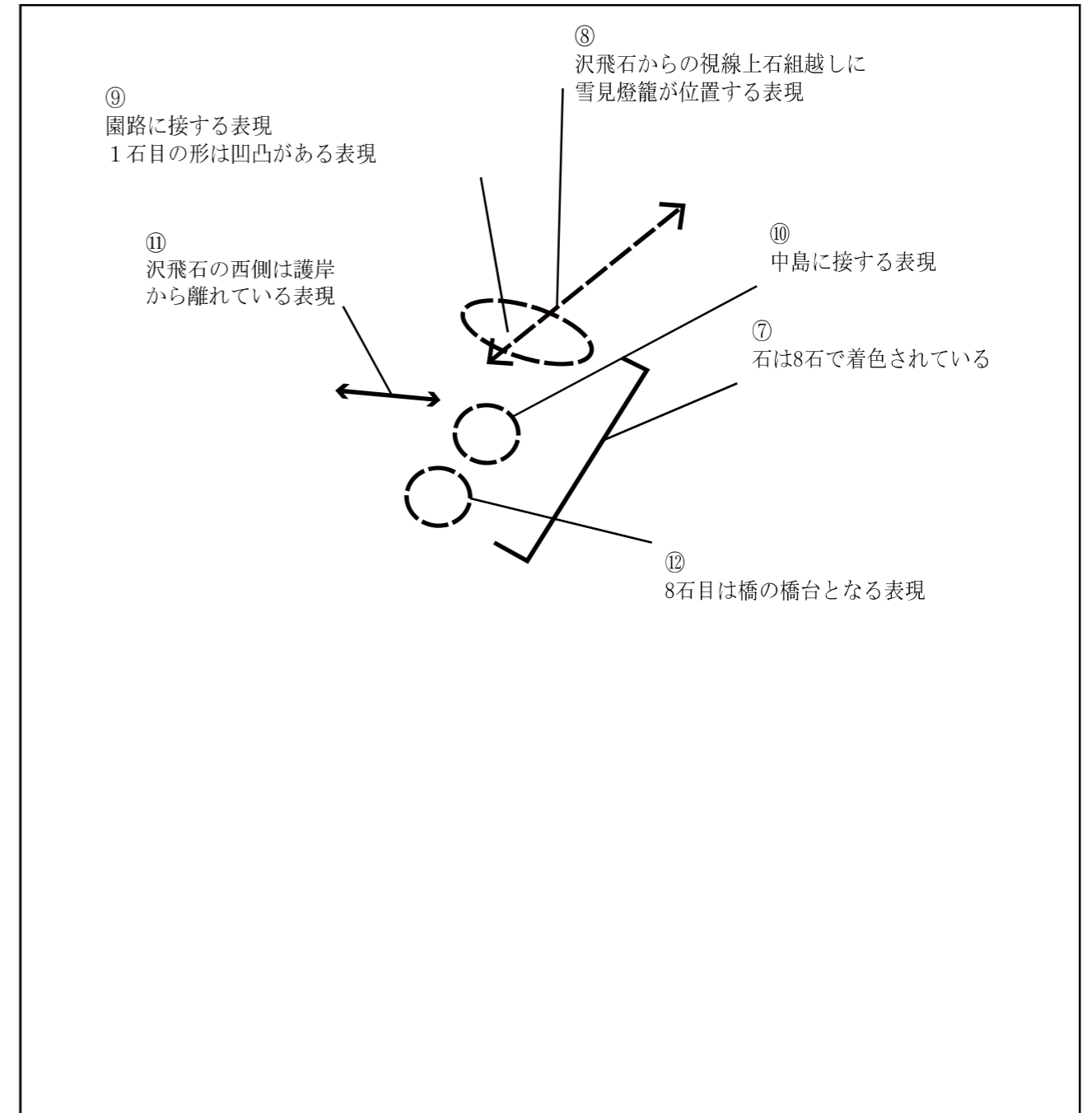


図 3-3-2 沢飛石 『尾二ノ丸御庭之図』部分 (徳川美術館所蔵)

(2) 発掘調査結果と絵図との比較

『御城御庭絵図』と発掘調査結果を比較し、沢飛石に関する検証結果を下表のようにまとめた。その結果、石材の数等違いはあるが絵図は庭園の実態を概ね反映しているものと考えた。

表 3-3-2 沢飛石における『御城御庭絵図』と発掘調査結果との比較検証結果

事項	絵図	検出遺構
沢飛石	<ul style="list-style-type: none"> ・ 8石 ・ 石①が護岸に接する ・ 石⑦と⑧が護岸に接しない ・ 千鳥打ちと三連打ちを組み合わせる ・ 三連打ち 1箇所 ・ 石材について、石①は大きい その他は概ね同様 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 7石と抜き取り痕が2石分 ・ 石①が護岸に組み込まれている ・ 石⑧と⑨が護岸に接する ・ 千鳥打ちと三連打ちを組み合わせる ・ 三連打ち 2箇所 ・ 石材は様々な形状、大きさ



図 3-3-3 沢飛石 『御城御庭絵図』部分
(名古屋市蓬左文庫所蔵)



写真 3-3-1 北園池東側の沢飛石
(発掘調査後上空より撮影)



写真 3-3-2 北園池東側の沢飛石
(発掘調査後北側より撮影)



図 3-3-4 沢飛石 遺構平面図

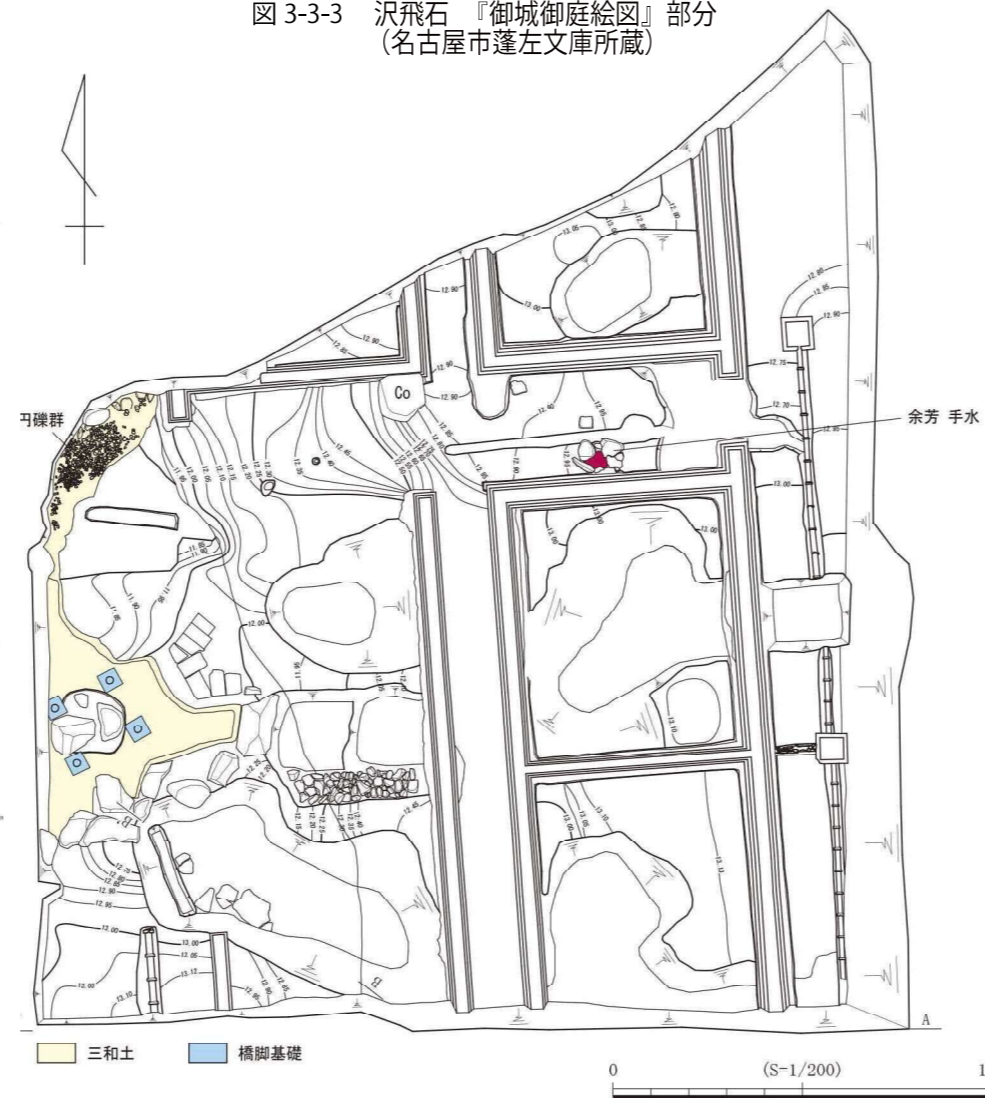


図 3-3-5 沢飛石 遺構平面図



図 3-3-6 沢飛石 オルソ画像

(3) 構造の検討

ア 現況

- 遺構が検出された飛石9箇所のうち、7箇所は遺構が露出しており、2箇所は飛石がなく抜き取り痕が露出している。

イ 修理方針

- 抜き取り痕2箇所について飛石を復元する。
- 飛石天端高さは隣接する飛石遺構の天端高さを考慮して設定する。

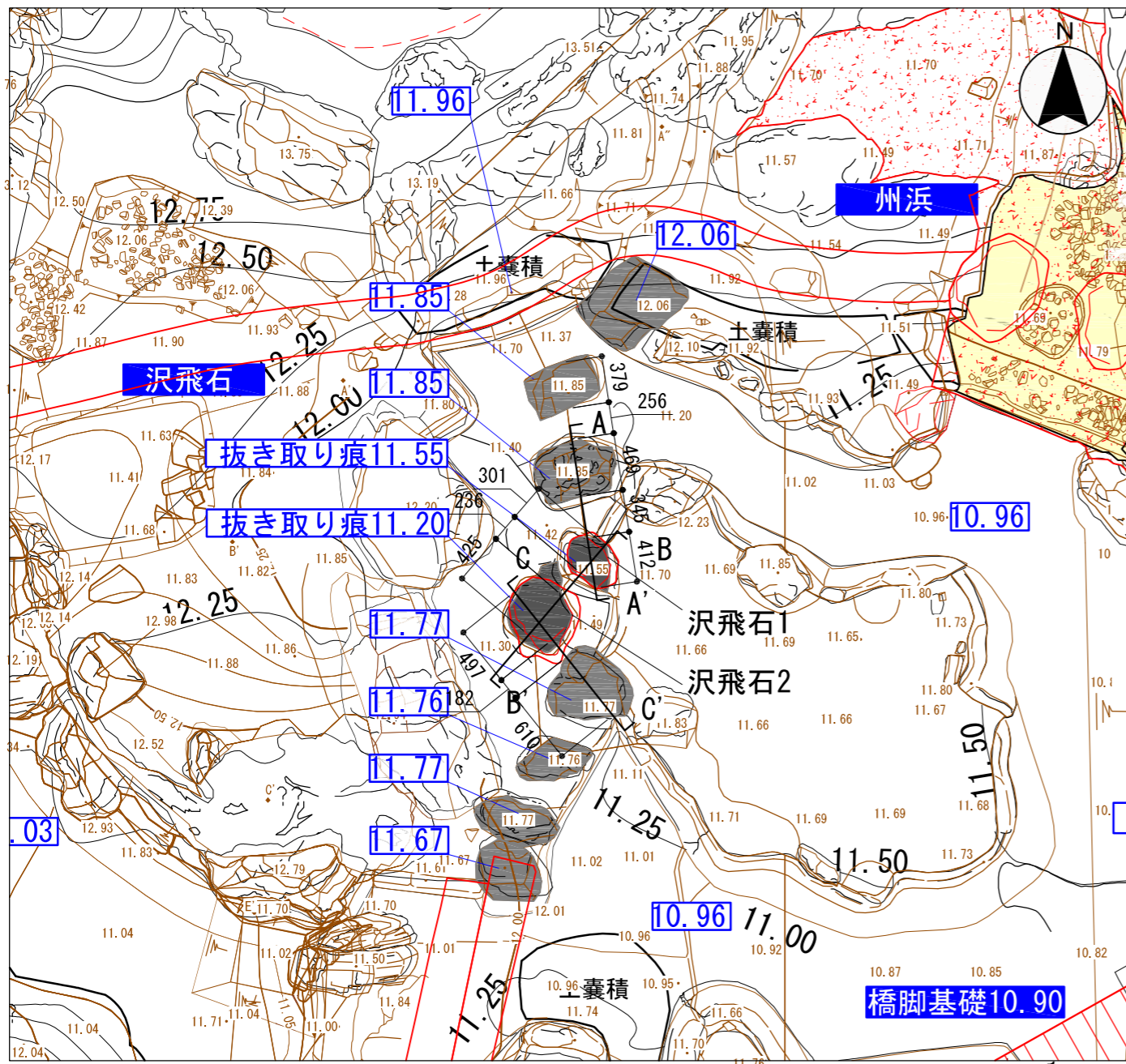
ウ 修理方法

- 抜き取り痕の内部を清掃後、飛石を設置する。
- 必要に応じてかませ石を設け、安定化させる。
- 目地はタタキを充填する。
- タタキの配合は、真砂土1m³当り石灰120kgと塩化マグネシウム10~20kg混合を標準とする。

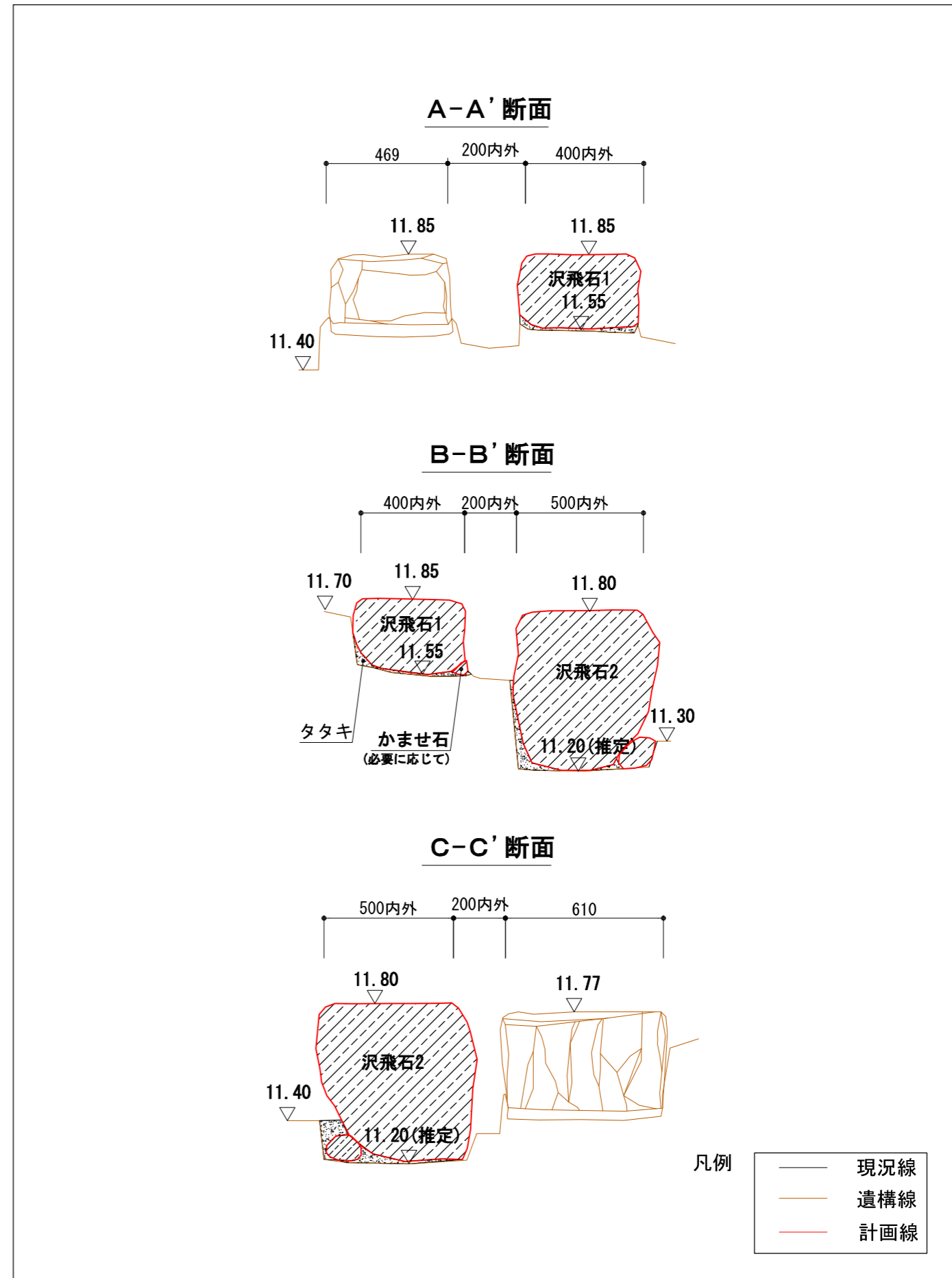


写真3-3-4 沢飛石の現況（北側より撮影）

平面図 S=1:50



構造図 S=1:20



3-4 州浜

(1) 絵図の比較検証

『御城御庭絵図』と『尾二ノ丸御庭之図』を比較し、州浜の検証結果を下表のようにまとめた。その結果、表現方法に違いがあることがわかった。

表 3-4-1 州浜における『御城御庭絵図』と『尾二ノ丸御庭之図』との比較検証結果

事項	御城御庭絵図		尾二ノ丸御庭之図	
州浜	①②	単色で着色の表現	④⑤	黒線での境界や複数色、もしくは濃淡で着色の表現
	③	飛石や石組を表現	⑥	同左



図 3-4-1 州浜 『御城御庭絵図』部分（名古屋市蓬左文庫所蔵）

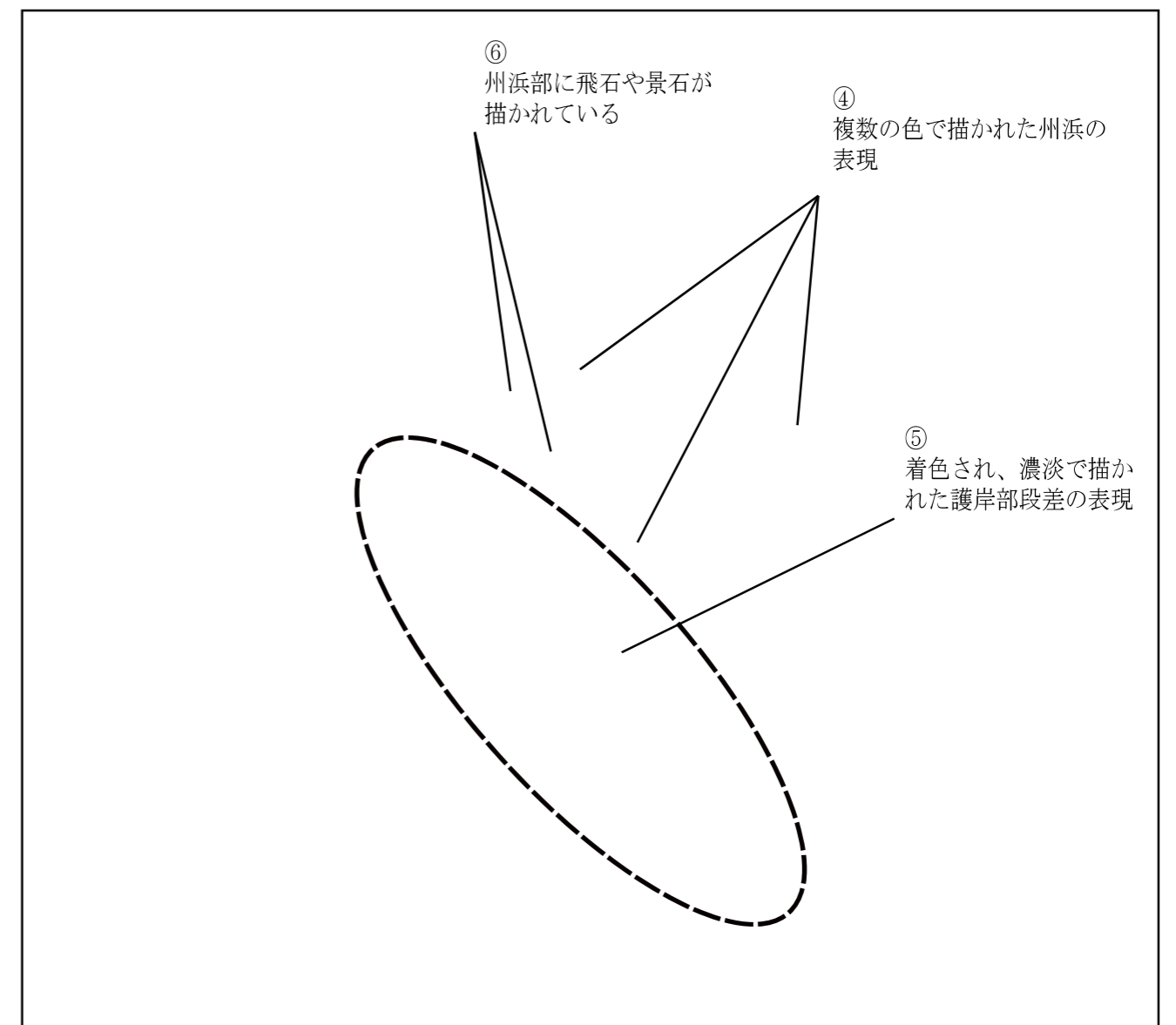


図 3-4-2 州浜 『尾二ノ丸御庭之図』部分（徳川美術館所蔵）

(2) 発掘調査結果と絵図との比較

『御城御庭絵図』と発掘調査結果を比較し、州浜に関する検証結果を下表のようにまとめた。その結果、護岸が階段状である等違いはあるが絵図は庭園の実態を概ね反映しているものと考えた。

表 3-4-2 州浜における『御城御庭絵図』と発掘調査結果との比較検証結果

事項	州浜
絵図	<ul style="list-style-type: none"> ・飛石や石組が含まれ、タタキ護岸1段 ・護岸の3石の間で形成
検出遺構	<ul style="list-style-type: none"> ・石材と階段状のタタキ護岸2段 ・傾斜部に円礫が敷き詰められている ・護岸の3石の間で形成 (うち2石は抜き取り痕)

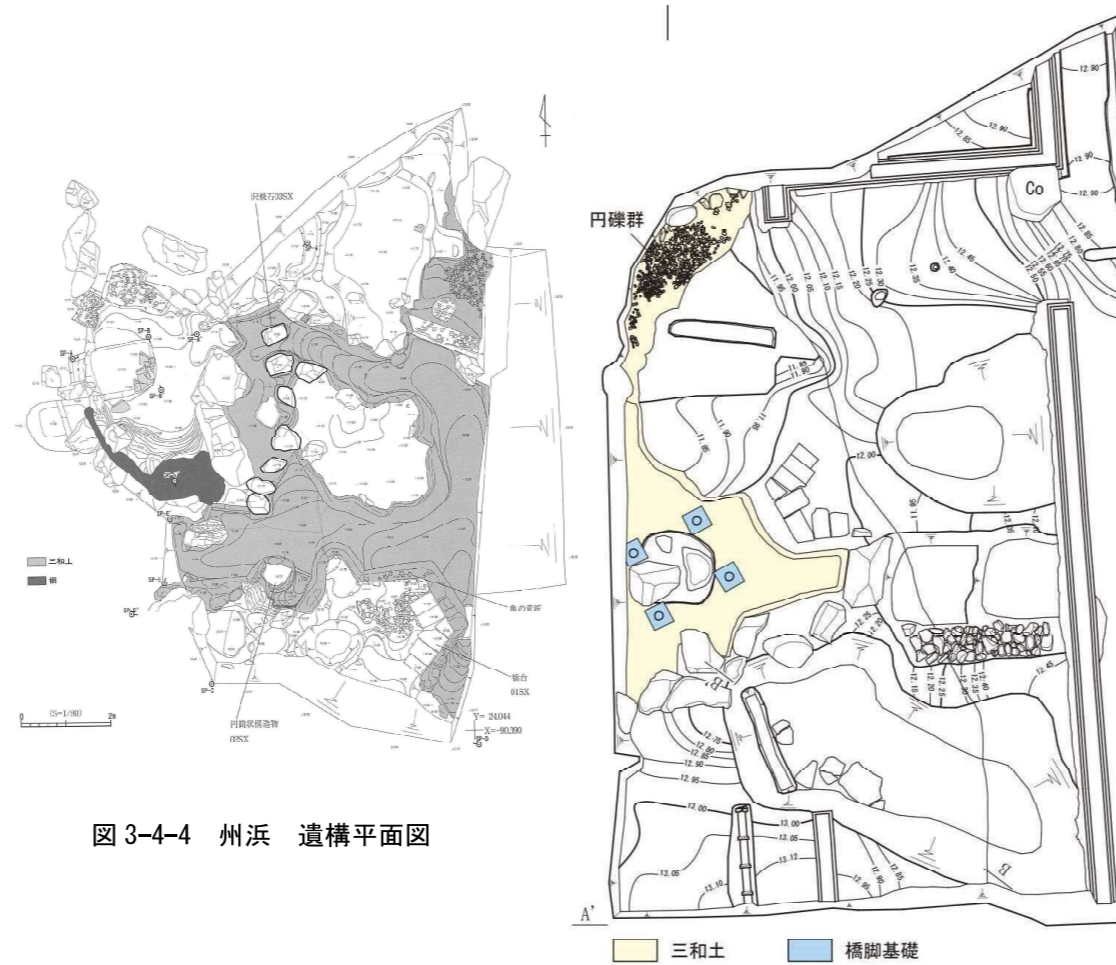


図 3-4-4 州浜 遺構平面図

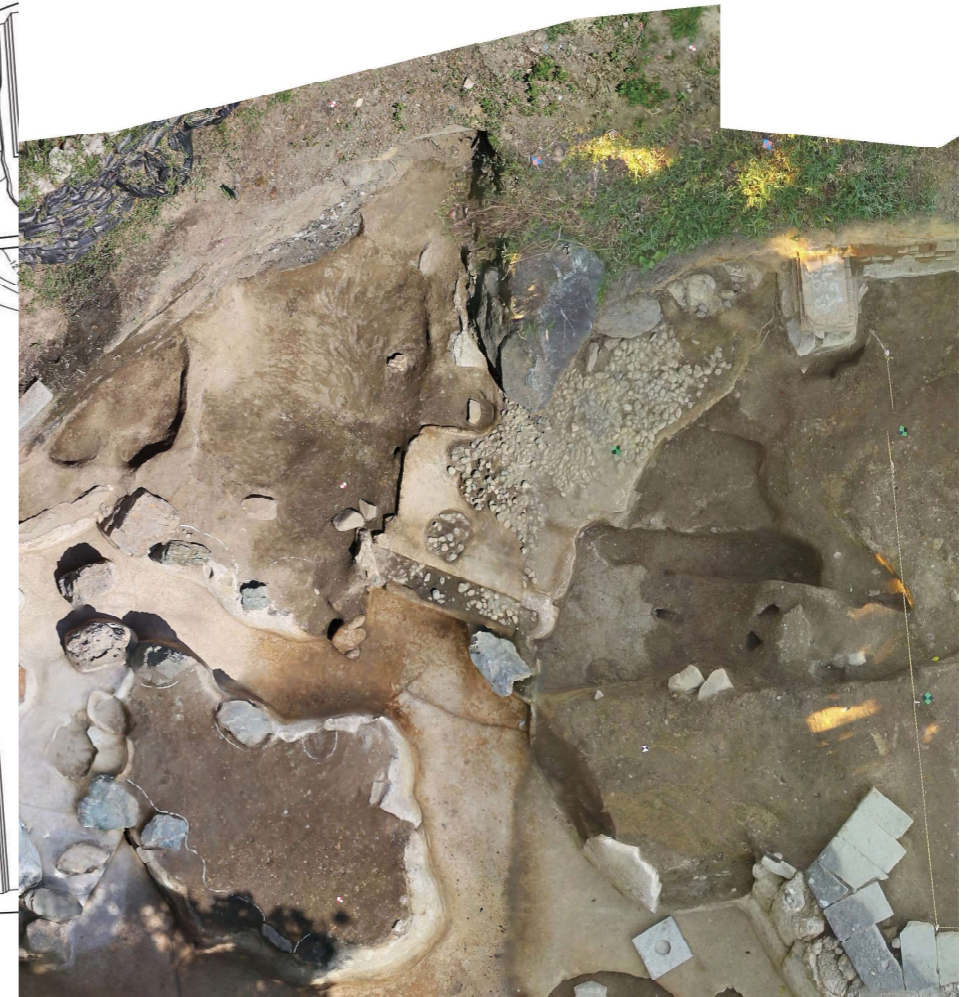


図 3-4-6 州浜石 オルソ画像 (合成・部分)

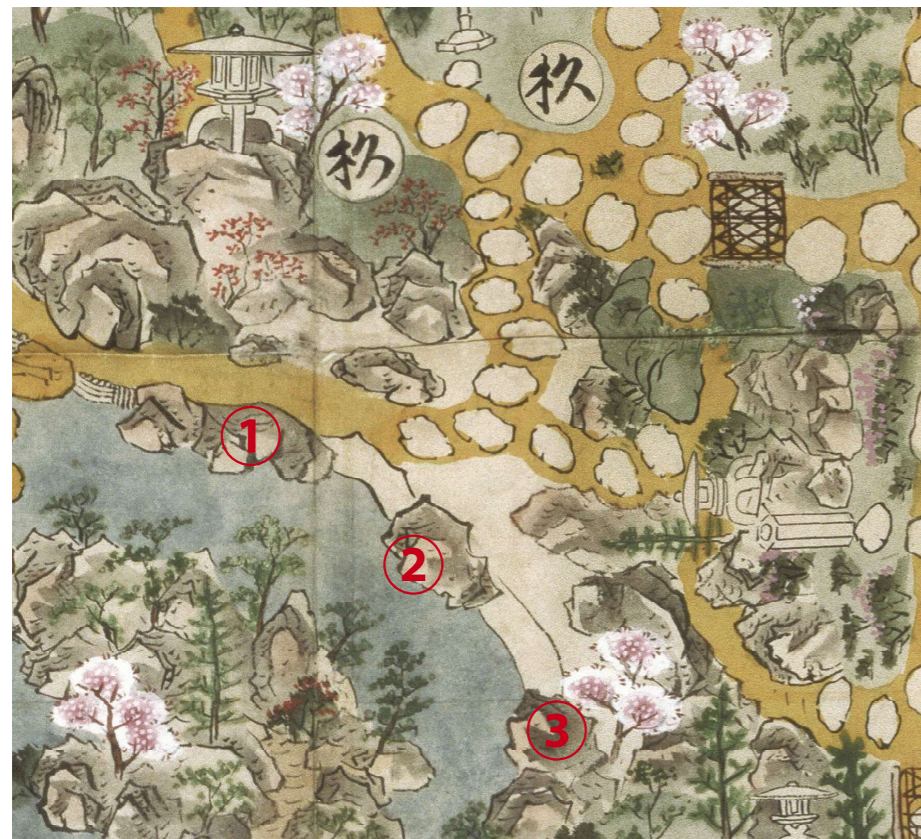


図 3-4-3 州浜 『御城御庭絵図』部分 (名古屋市蓬左文庫所蔵)



写真 3-4-1 北園池東側の州浜 (発掘調査後東側より撮影)

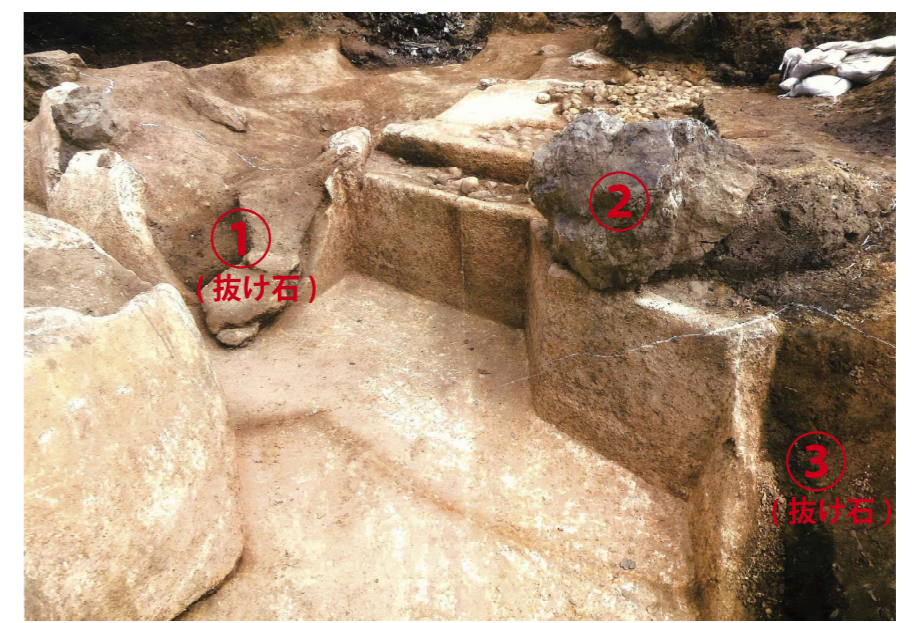


写真 3-4-2 北園池東側の州浜 (発掘調査後南側より撮影)

(3) 構造の検討

ア 現況

- ・州浜は権現山の裾に位置し、州浜検出遺構近傍に石組が復元されている（令和5年度施工済）。
- ・遺構が検出されたタタキ護岸部は露出保存されている。
- ・遺構が検出されたタタキ礫敷き部は保護層を設けて保存されている。
- ・州浜際の護岸石2石が取り外されている。

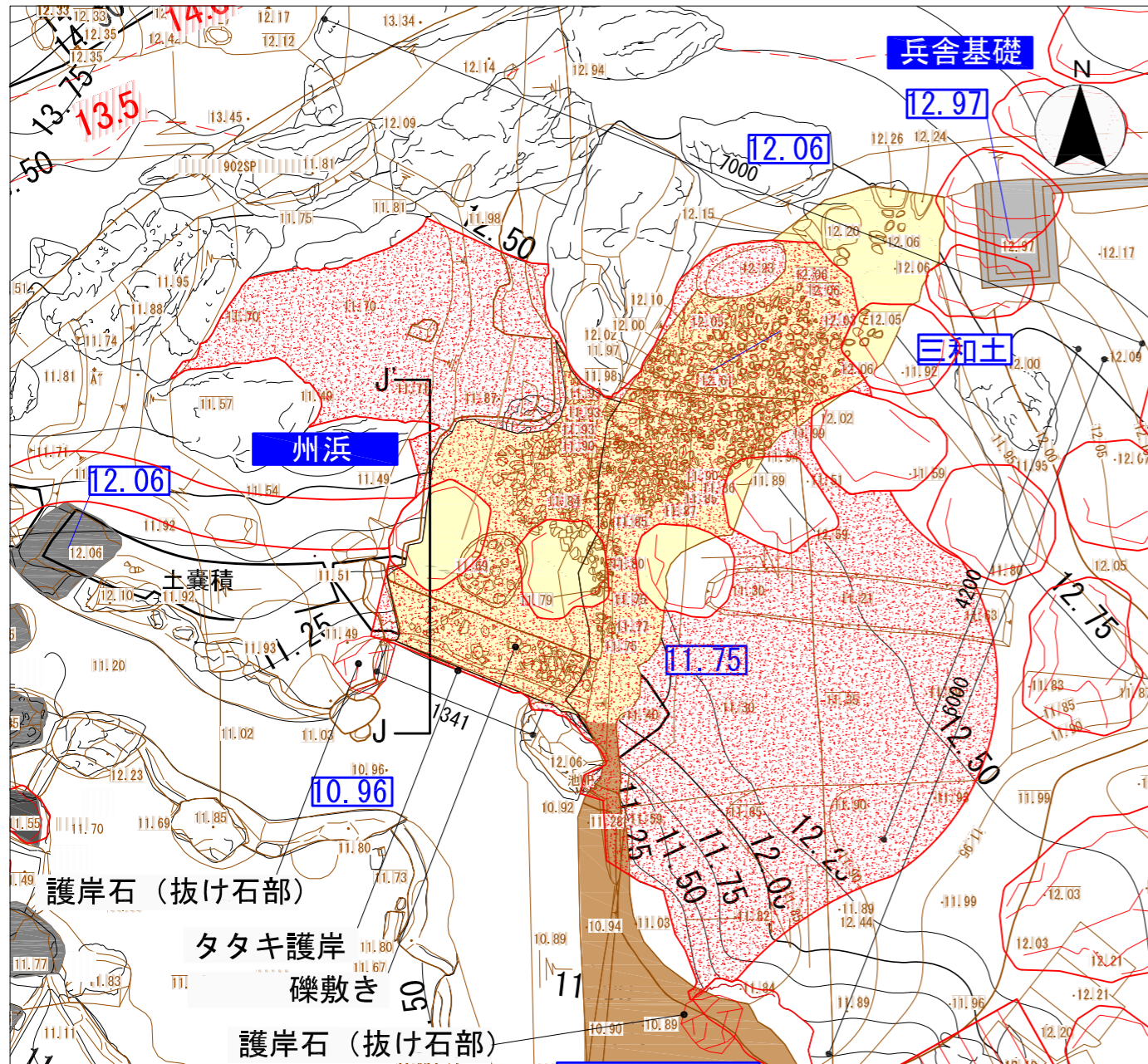
イ 修理方針

- (ア) 案 礫敷き部は、保護層を設けてタタキ礫敷きを復元し、遺構の前面にタタキ護岸を復元する。
- (イ) 案 礫敷き部は、1段目は遺構直上に、2段目より上部は保護層を設けて礫敷きを復元する。タタキ護岸は露出とする。

ウ 修理方法

- (ア) 案
 - ・礫敷き部は、タタキt=150に礫を敷く。
 - ・タタキ護岸部は、遺構の前面において下部からタタキにて版築により締固めを行う（t=150）。
- (イ) 案
 - ・礫敷き部は、1段目は遺構直上に礫を敷く。2段目より上部は、保護層を設けて礫を敷く。
 - ・タタキ護岸は、露出とする。
 - ・タタキの配合は、真砂土1m³当り石灰120kgと塩化マグネシウム10～20kg混合を標準とする。

平面図 S=1:50



構造図(J-J' 断面) S=1:20

